

金井紫雲編

藝州資料

熊猪羊

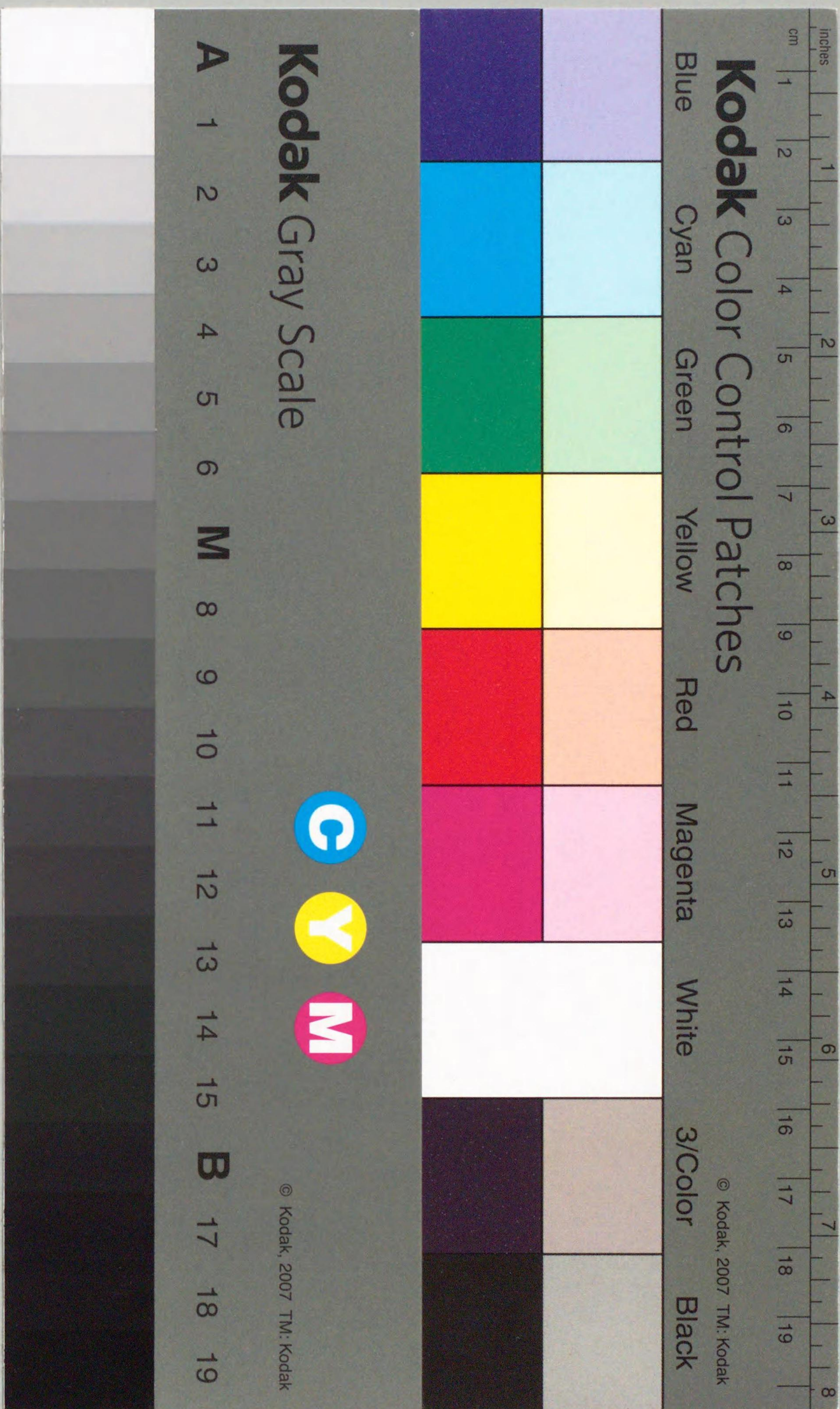
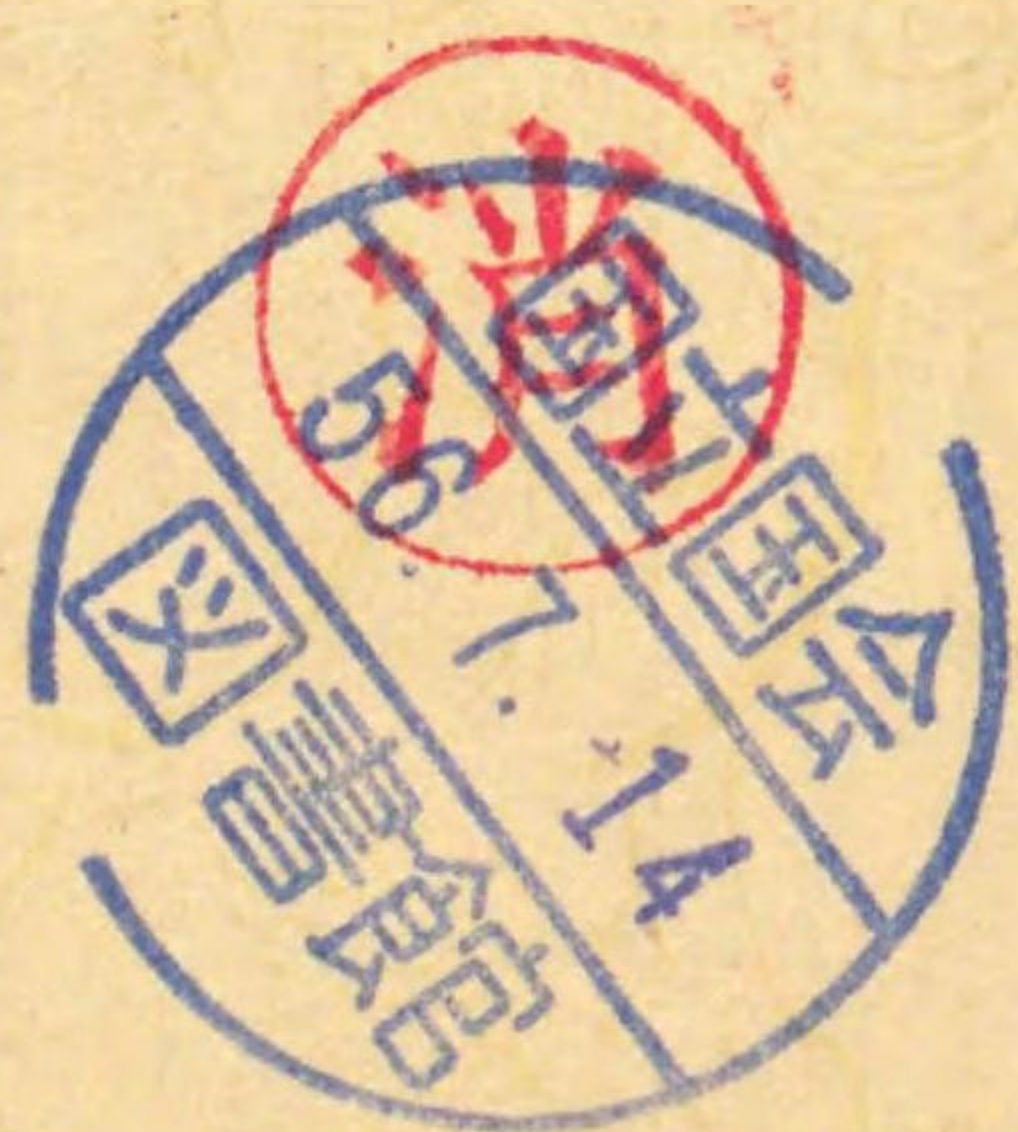
第三十一期

K231

35



81W57856



藝術資料

第三期
哺乳類篇

第十一冊「熊猪羊」

要目

口繪

- 森狙仙筆 野猪之圖 (原色版)
- 傳山樂筆 東福寺開山堂の羊 (玻璃版)
- 華嚴緣起繪卷の猪
- 冷泉爲恭筆 秋草 双猪
- 野猪狩の古圖
- 竹内栖鳳筆 野猪之圖
- 圓山應舉筆 躑に熊
- 森一鳳筆 雪中 熊
- 岸竹堂筆 熊
- 島田墨仙筆 山中 勇者
- 松村五郎筆 北極 熊
- 熊の頭部 (彫刻)
- 雪舟筆 黄初平
- 傳山樂筆 東福寺開山堂杉戸繪 (部分)
- ホルマンハント筆 贖罪の羊
- ミレー筆 羊飼の女
- 森川杜園の羊 (扉)

本文

- 猪の概説……………二
- 日本古代史と猪……………四
- 野猪五題……………六
- 隨筆の猪……………八
- 萬葉集に現はれた猪……………一〇
- 猪武者と立猪……………一一
- 狩場の猪……………一二
- 仁田忠綱猪逆乗の事……………一三
- 猪の名畫……………一四
- 野猪の和歌 俳句……………一五
- 熊の種類と概説……………一六
- 北越雪譜の熊……………一八
- 隨筆に現はれた熊……………二〇
- 熊の繪畫……………二一
- 熊の和歌と俳句……………二二
- 羊と山羊と……………二五
- 羊の傳説神話……………二六
- 蘇武と羊……………二七
- 羊と神仙……………二八
- 上毛の羊碑……………二九
- 羊と美術作品……………三〇
- 羊の漢詩……………三一

野猪之圖

森狙仙筆

藝術資料

第三期
哺乳類篇

第十一冊「熊猪羊」

要目

口繪

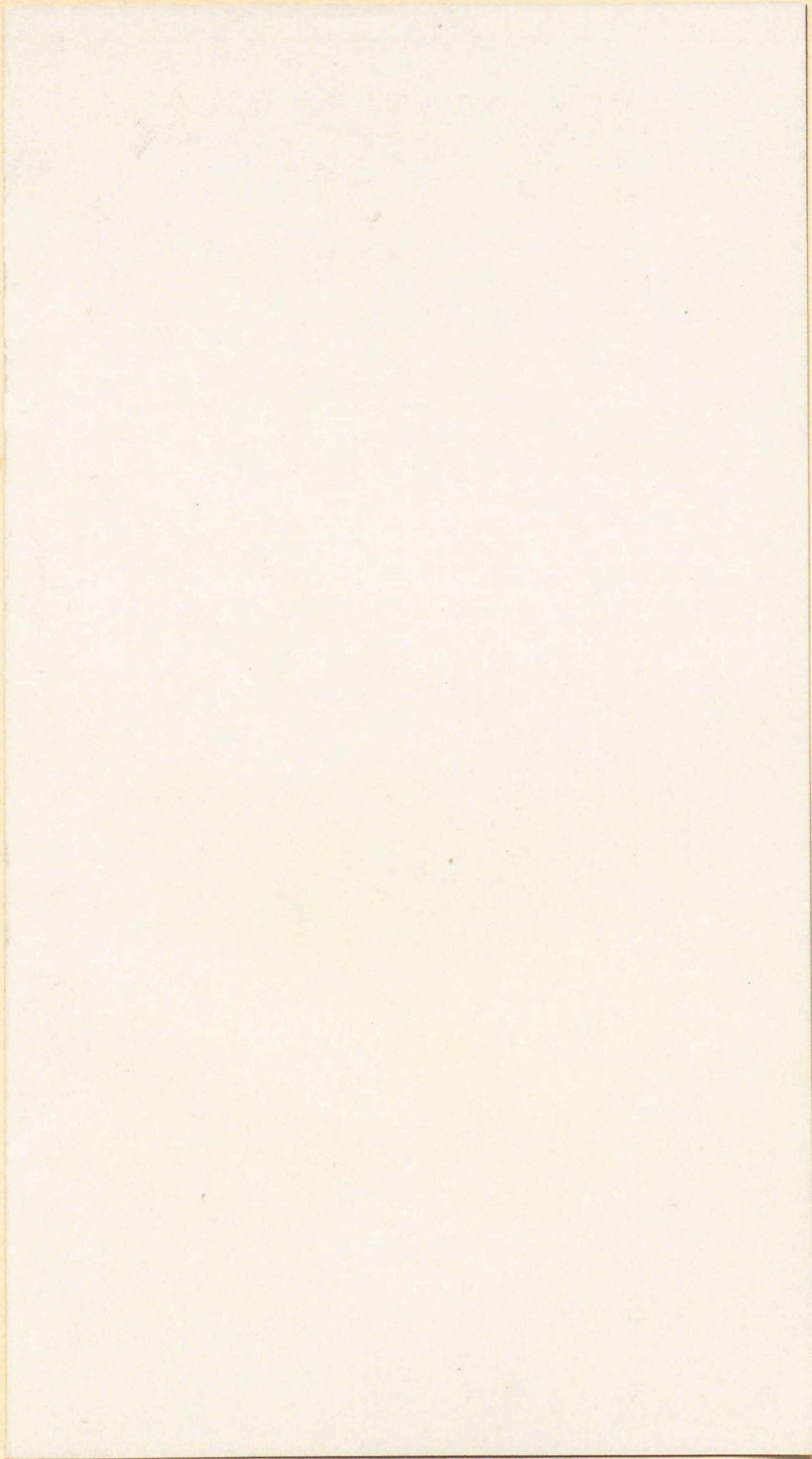
- 森狙仙筆 野猪之圖 (原色版)
- 傳山樂筆 東福寺開山堂の羊 (玻璃版)
- 華嚴緣起繪卷の猪
- 冷泉爲恭筆 秋草 双猪
- 野猪狩の古圖
- 竹内栖鳳筆 野猪之圖
- 圓山應舉筆 躑に熊
- 森一鳳筆 雪中熊
- 岸竹堂筆 熊
- 島田墨仙筆 山中勇者
- 松村五郎筆 北極熊
- 熊の頭部 (彫刻)
- 雪舟筆 黄初平
- 傳山樂筆 東福寺開山堂杉戸繪(部分)
- ホルマンハント筆 贖罪の羊
- ミレー筆 羊飼の女
- 森川杜園の羊 (扉)

本文

- 猪の概説……………二
- 日本古代史と猪……………四
- 野猪五題……………六
- 隨筆の猪……………八
- 萬葉集に現はれた猪……………一〇
- 猪武者と玄猪……………一一
- 狩場の猪……………一二
- 仁田忠綱猪逆乗の事……………一三
- 猪の名畫……………一四
- 野猪の和歌 俳句……………一五
- 熊の種類と概説……………一六
- 北越雪譜の熊……………一八
- 隨筆に現はれた熊……………二〇
- 熊の繪畫……………二一
- 熊の和歌と俳句……………二二
- 羊と山羊と……………二五
- 羊の傳説神話……………二六
- 蘇武と羊……………二七
- 羊と神仙……………二九
- 上毛の羊碑……………三〇
- 羊と美術作品……………三一
- 羊の漢詩……………三三

野猪之圖

森狙仙筆



裡

淋

之

圖

森

林

山

羊



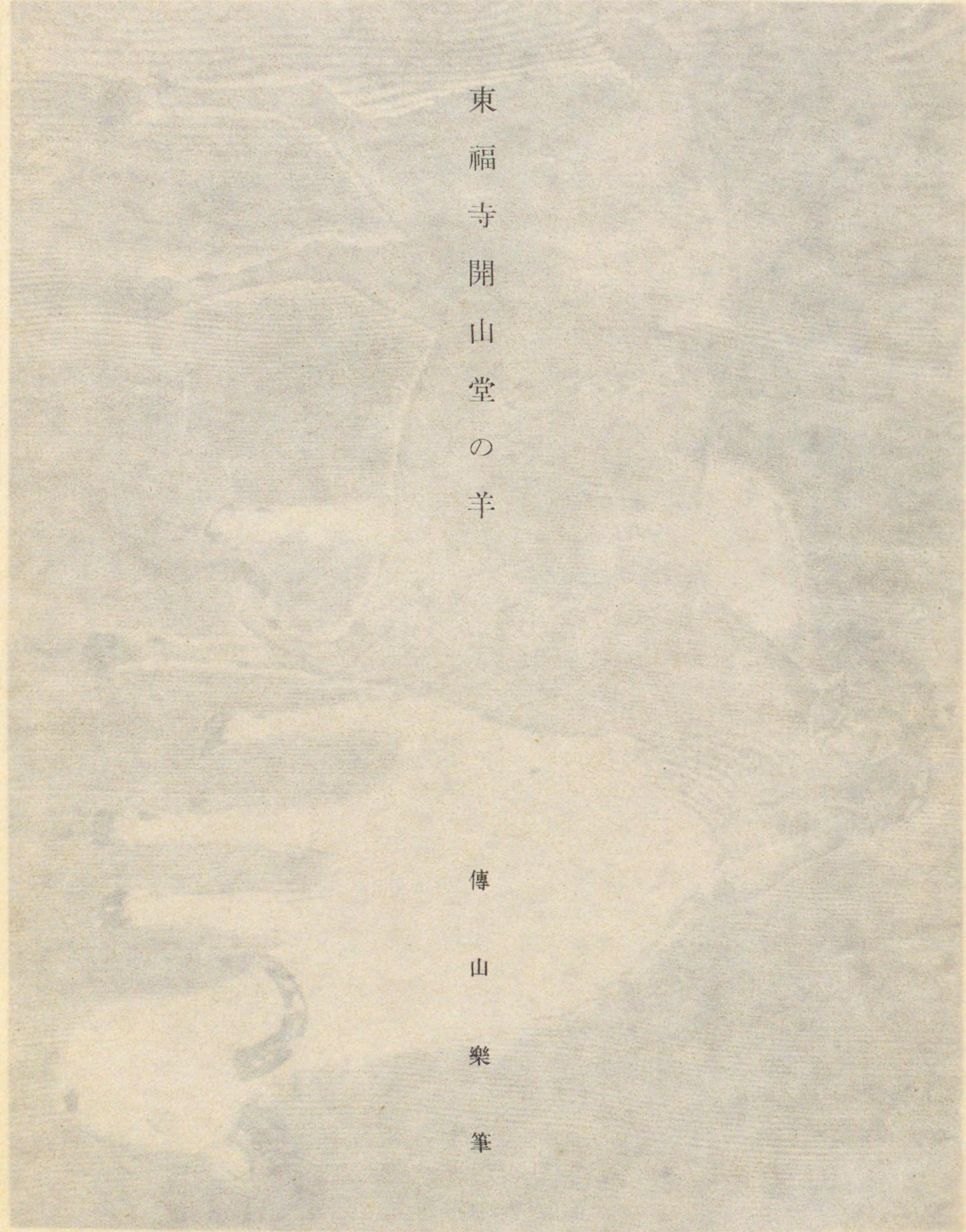
片竹堂筆
 高田五郎筆
 松村五郎筆
 熊の頭部(彫刻)
 雪舟筆
 傳山樂
 ホルマント筆
 森川社園の羊(彫)

圖

熊に現はれた熊
 熊の繪畫
 熊の和歌と俳句
 羊と山羊と
 羊の傳説神話
 蘇武と羊
 羊と神仙
 上毛の羊碑
 羊と美術作品
 羊の漢詩

東福寺開山堂の羊

傳山樂筆



東福寺開山堂の羊

傳山樂筆



東 誦 寺 閑 山 堂 の 羊

野 山 樂 羊



猪の巻繪起線殿華



秋
草
双
猪

冷
泉
爲
恭
筆

圖 古 符 號 種





野 猪 之 竹 圃 图



躑
躑
に
熊

圓
山
應
舉
筆





雪
中
熊

森
一
鳳
筆



熊

岸
竹
堂
筆



筆 仙 墨 田 鳥

者 勇 中 山

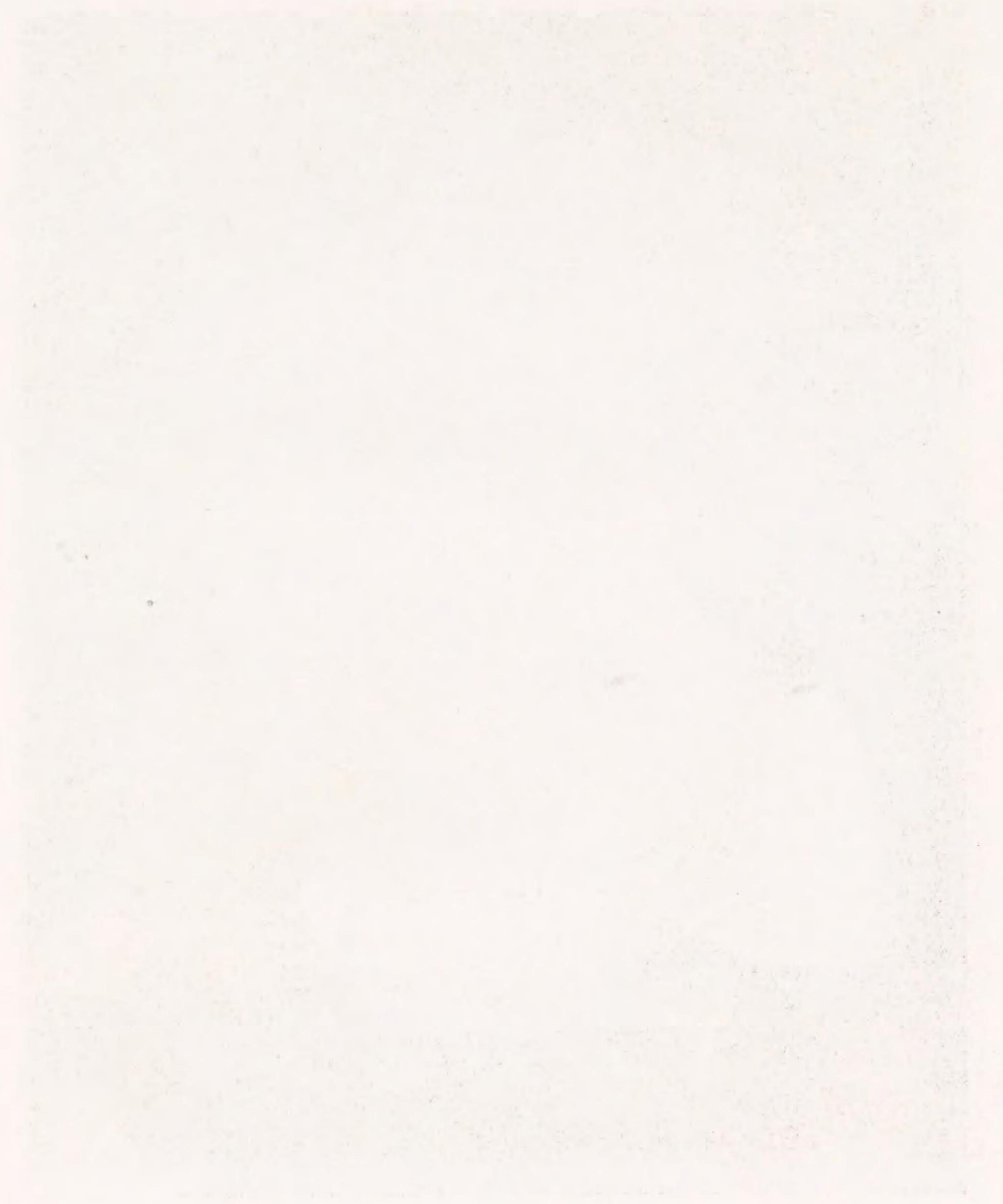


筆 郎 五 村 松

熊 極 北



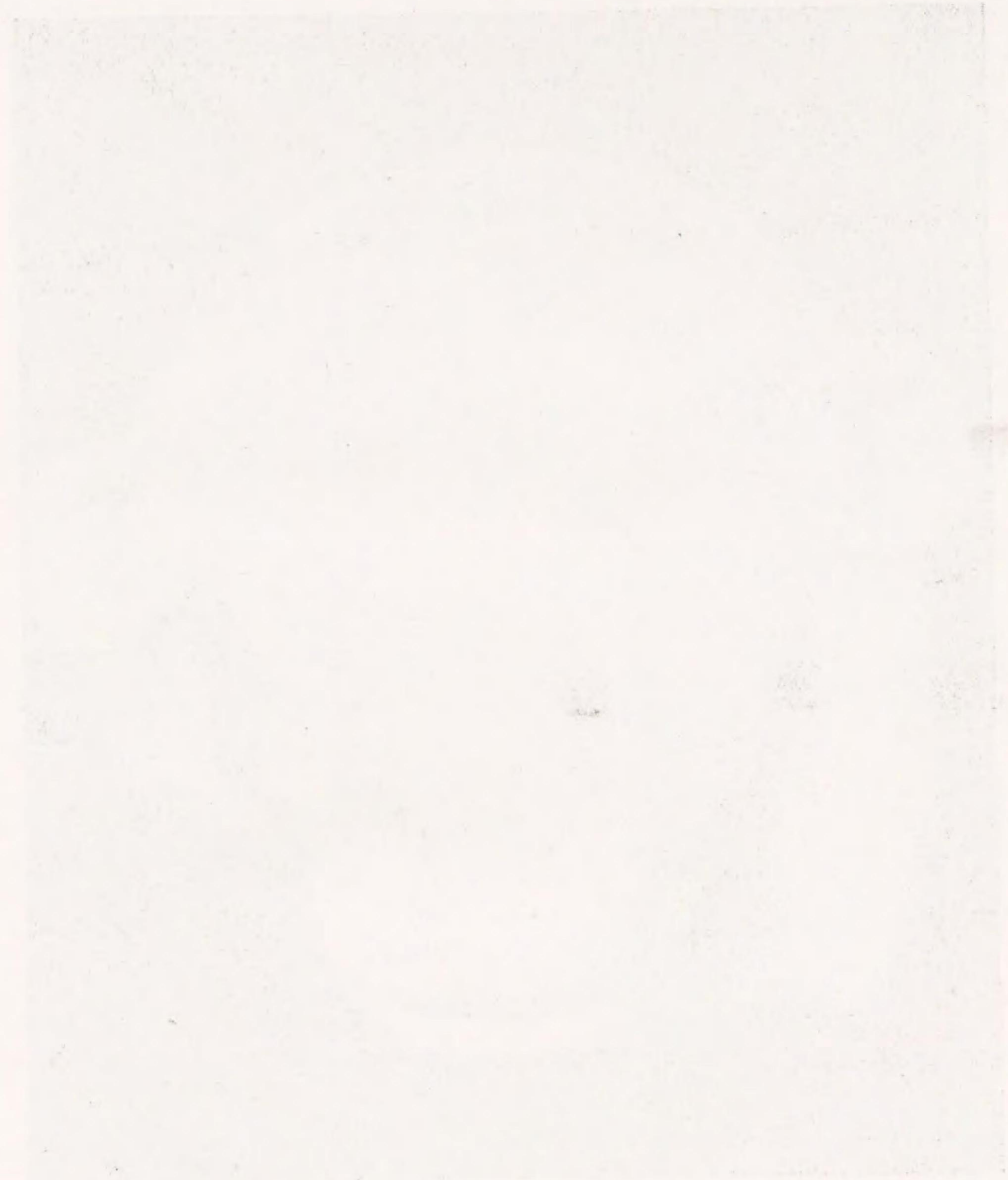
(刻彫) 部 頭 の 熊





黃
初
平

雪
舟
筆





筆樂山傳

(分部) 繪戶杉堂山開寺福東

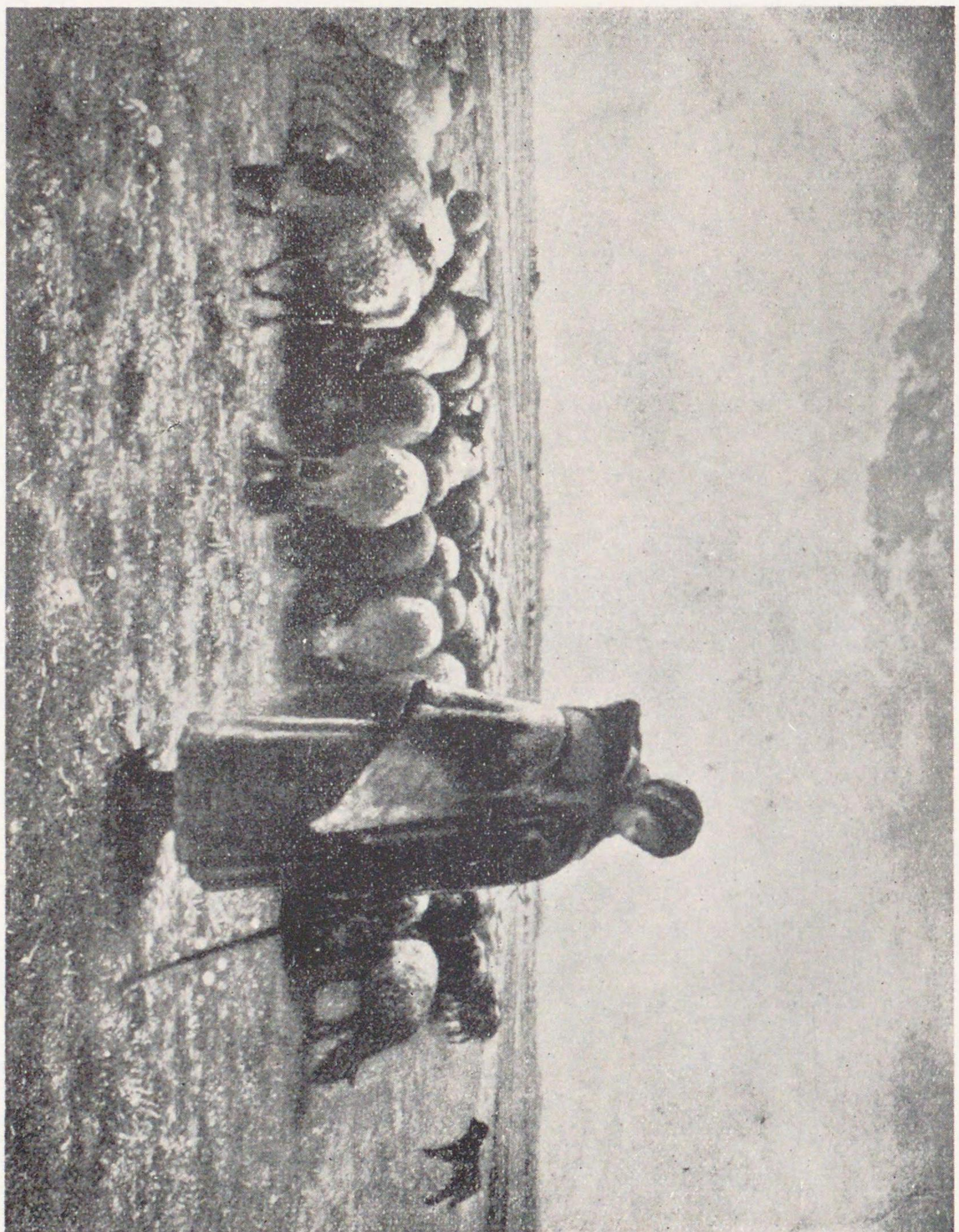


羊トシハムアルホ

羊の罪贖



羊の罪贖



羊飼いの女

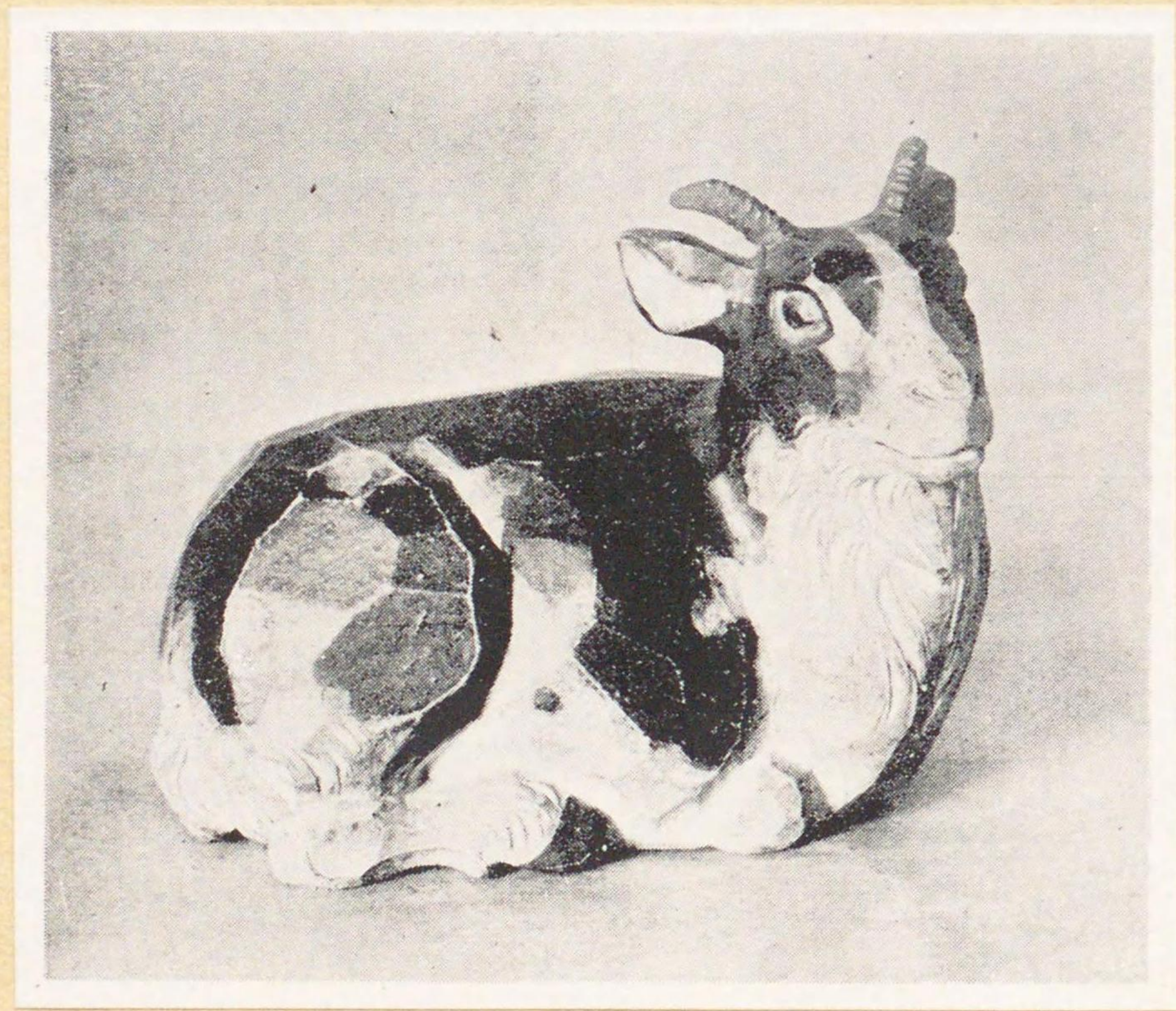
羊飼いの女

編雲紫井金

料資州藝

冊一十第 篇類乳哺 期三第

羊 猪 熊



行刊堂艸芸 會社 合名

猪の概説



キノシシ属

キノシシ属は舊世界の温帯及熱帯に分布し東は日本ヒリツピンより西はアイルランドに至り南東は馬來地方を経てニューギニアに達せり、約三十種を有す、すべて夜行性にして夜林中溪澗を徘徊し、食物を索め水を飲む、食餌は小獣及昆蟲より植物の根及果實までを食ひ、明かに雑食性なり、胃は單純なるを以て反芻せず、往々白晝活動するものあれ共、動作鈍重にして甚だ振はず、之に反して夜間の移動は頗る敏速なるを常とす、キノシシ属は一牡多牝にして蕃殖季たる十二、一の兩月には牡相互間に争闘あり、妊孕大約四ヶ月にして四一五月頃四一二仔を分娩す、牝の乳房は六對のもの多きも極端は三十八對と云ふべし。體は一般に中形又は大形にして、粗大なる毛を生ぜり、吻は延伸してほそく、吻頭はひろがりて直截し殆ど裸出す、足は細く各四

趾あり。

頭骨は甚だ狭長にして高し、鼻骨も甚だ長くして狭し、角を生ずる事無し、齒式は門33大小前44白33||44にして、四十四本の齒あり生涯を通じて門齒及前白齒を有し且つその機能あるは偶蹄目中の驚異なるが、上顎の第三門齒及兩顎の第一前白齒は往々消失するを見る、犬齒は牡にては大形なれ共、牝にては小し、白齒は丘齒性を呈す。

キノシシ

クサイナギ、キナ、アハ、フスキ
フスキドリ、キ、ヤマクケラ、シ
ナガドリ、ウノヲ、カルキ、ウリ
バウ、コプリコ

本種は本州、四國、九州に産す、本州の東北地方にては既に絶滅せるもの如し、又スウインホー氏に従へば、臺灣にも本種を産することなるが、暫く大に疑を存す、晝は灌木叢生せる陽地の凹所に眠り、夜は徘徊して吻

K231
35

て短く判然せざる位なり、四肢はほそく且つ短く、第二第五の兩趾は小さくして其の用無く地を踏み歩行の用を辨ずるは第三第四の兩趾のみなり、尾は稍々太くして毛を叢生す。

上顎の門齒は第一より第三に向ひ次第に小し、下顎の門齒は狭長にして密接し切面は水平線を爲す、牡にては犬齒は大きくして口外に突出す、上顎の者は強く外上方に曲り先端少しく内方に曲る、下顎の者は上外方に向ひ僅かに後方へ曲り其の後縁は上顎犬齒の前縁と觸接せり、白齒は奥のもの程大きく下顎の第一第二兩白齒間は廣く隔離す。

毛皮、黒色、全體に黒褐色の太き剛毛ありキノシシは其の食性に徴する時は、農林業上の有害動物なる事明かなれ共、狩獵の目的物としては最も興味あり、且つ效用多きものと認めらる、其肉は所謂ヤマクケラにして、獨特の風味あり、ブタよりも脂肪少く、蛋白質多く、日本産野生哺乳動物中、最も美味なりとす、背部の毛は刷毛及筆の原料に供せらる大正十二年六月狩獵調査會の調査に據れば、我國一ヶ年の捕獲頭數一千六百六十九頭にし

て、一頭六拾圓の價格ありとし、約十萬圓の合價となる。

リウキウキノシシ

(黒田長禮氏新稱)

イシカキシマキノシシ

本種は奄美大島、沖繩島、石垣島及西表島に棲息す、嘗て歐洲中部及南部に産する所の Sus scrofa linnaeus, 1758 の系統に屬すと云へる議論もありしかども、寧ろ内地産キノシシの系統に近きものと考へらる。

キノシシに比ぶれば、體も頭骨も共に小さく鼻骨の幅も狭し、幼仔は暗褐色の地に褐黒色の廣き縦條あり。

附記、以上の外、臺灣にはタイワンキノシシ、朝鮮にはカウライキノシシを産す。

農林省編——哺乳動物圖解——

ゐのしし

ゐのしし(野猪科)

丈低き動物にして肩胛迄の高さ八四〇耗内

端にて地を掘起し食物を索む、ネズミ、ウサギ等の幼仔、ムカデ、ヤスデ、ミミズ等の動物、ナラ、カシ、ブナ、シヒ、クリ等の果實、ダイヅ、アヅキ、イネ、サツマイモ、サトイモ、タケノコ、キノコ等の植物を食ふ、其他

小鳥の巢をつついて雛を食ひ、谷川の石下よりサハガニを引出して捕へ、マツの根其の外喬木の樹皮をも食ふことあり、食物は之を反芻せず、白晝の動作は徐々にして頗る振はざるを常とす、物に驚ける時及夜間の移動は存外敏捷にして、所謂猪突を爲せ共、長距離に及ばざるは人口に膾炙する所なり、交尾季は大抵一月中にして此時牡は互に相闘ふ、牝は妊孕約四ヶ月にして、四一五月(稀に六月上旬)、普通四一六(稀に一〇)仔を分娩す、仔は淡き暗褐色の地に、白の縦縞を有し、ウリバウ(静岡縣の方言)と稱せらる、三歳にして成熟す。壽命は二〇—三〇歳に至るといふ。

體は肥大し、大なるものは重量七六・〇キログラムを超ゆ、頭は割合に小さく、鼻端は長く延びて可動性の物を爲し其の端に鼻孔を開けり、耳は小し、頸は文字通りのキクビにし外あり、重量七五キログラムを出づ、毛色は黒毛にして黒褐色の剛毛を混生し老成したるものは背面に白毛を混するに至る。

頭骨は狭長にして鼻骨極めて長し、齒式は門33大小前44白33||44、犬齒は牡は大牙を牝は小牙を有す、牡は常に牝よりも大形なり。此の動物は晝間は山林中に潜伏し夜は出でて吻端を以て地面を掘り野鼠類、蚯蚓、さしがに等の小動物並びにかし類の種子、甘藷、豆類等を好み食ふ、交尾期は一月頃にして、約四ヶ月の後、四一五月頃四一六頭の仔を分娩す、幼期は體に縦線あり、静岡以西にて『うりほう』と稱す、本種は本州四國及び九州に産し、『琉球のしし』(琉球孤島)『たいわんのしし』(臺灣)等あり、肉は最良なり。

——日本動物圖鑑——

多くの動物は武器として彼等の齒、特に犬齒を用ゐる、海象は恐ろしい力で打ち下ろし野猪は上方に向いて居る兩顎の犬齒で突きあげる、野猪の類でも、馬來猪の犬齒は上方に向いてゐるけれども、武器といふよりは寧ろ楯と云つた方がいゝ位後方に彎曲してゐる。

——トムソン——科學大系——

81W57856

日本古代史と猪

猪は獸肉中最も美味のものであり、毛皮も服装や敷物や各種の用途に供せられるので狩獵上の主要動物とされてゐた、従つて日本でも記紀をはじめ風土記等にも繁く現はれてゐる、以下『日本書紀』によつて、古代史に現はれた猪を列挙して見る。

狩野の悲劇

猪のことの多く見えるのは、『雄略紀』である、先づ此の紀には眉輪王に關する悲劇に次いで、市邊押磐皇子が、天皇の憎しみを受け悲惨な最期を遂げてゐる、原因は穴穗天皇即ち安康天皇が御位を押磐皇子に禪らせ給はんとした事に發してゐる。此の條に曰く

冬十月癸未朔、天皇、穴穗天皇の會に市邊押磐皇子を以て國を傳へ、而して遙に後の事を付囑けむと欲せしを恨みて、乃ち人を市邊押磐皇子に使はして、陽りて狡獵せむと期り、遊郊野せむと勸めて曰く、近江の狹狹城君韓倭言さく、今、近江の來田綿の

蚊屋野に猪鹿多に有り、其の戴けたる角、枯樹の末に類たり、其の聚まれる脚、弱木の株の如し、呼吸氣息朝霧に似たり、願くは皇子と、孟冬作陰之月に、寒風肅かなる晨に將に郊野に造遙びて、聊か情を娛めて以て聘せ射むと、市邊押磐皇子乃ち隨ひて馳獵す、是に於て大泊瀬天皇弓を彎き馬を驟せ、陽り呼び、猪有りと曰ひて、即ち市邊押磐皇子を射殺しつ。

葛城山の猪

雄略紀ではなほ、葛城山で猪を蹴殺し給ふたことが名高い、曰く。

五年夏二月、天皇葛城山に狡獵したまふ、靈鳥忽に來れり、其の大きき雀の如し、尾長くして地に曳けり、且つ鳴きて努力努力と曰ふ、俄にして逐はる、嗔猪草の中より暴に出でて人を逐ふ、腐徒樹に緣り大に懼る、天皇舍人に詔して曰く、猛獸も人に逢ひては則ち止む、宜しく逆射て且た刺しと

めよ、舍人性懦弱、樹に緣りて色を失ひ、五情無主なり、嗔猪直に來りて天皇を噬ひまつらむと欲す、天皇弓を用て刺し止めて脚を擧げて踏み殺したまひつ、是に於て田罷みて、舍人を斬らむと欲す、舍人刑に臨み歌を作りて曰く、

やすみしし、我が大君の、あそばしし、

猪のうたき、かしくみ、我が逃げのほり

し、荒丘の上に、榛が枝あせを。

皇后聞しめし悲みたまひ、感を興し止めた

まふ、詔して曰く、皇后、天皇に與したま

はずして舍人を顧みたまふ、對へて曰く、

國人皆謂ふ、陛下安野したまひて、獸好み

たまふ、無乃可からざるか、今陛下嗔猪の

故を以て舍人を斬りたまはば、陛下譬へば

豺狼に異なること無けむ、天皇乃ち皇后と車

に上りて歸りたまふ、萬歳と呼びて曰く、

樂しきかな、人皆禽獸を獵る、朕は善言を

獵り得て歸ると。

『古事記』には、美和河の童女、引田部赤猪子

のことがある。但し、名だけのものである。

山猪の御述懐

降つて三十二代崇峻天皇の御宇、天皇蘇我氏の專横を憎ませ給うて、山猪に事よせて御述懐あり、曰く

五年冬十月癸酉朔丙子、山猪を獻るもの有り、天皇猪を指して詔して曰く、何れの時にか此の猪の頸を斷るが如く、朕が嫌しとおもふ所の人を斷らむ、多に兵仗を設けたまひ、常のときに異なることあり、壬午、蘇我馬子宿禰、天皇の詔りたまひし所を聞きて、己れを嫌ひたまはんことを恐れ、儻者を招き聚めて、天皇を弑しまつらむことを謀る、

と、遂に東漢直駒天皇を弑し奉つた。

猪頭を蒙る

『風土記』には、猪の現はる、もの極めて多い、その中二三を擧げる、『山城風土記』賀茂の社の條に曰く

妹の玉依日子は、今の賀茂の縣主等が遠祖なり、その祭祀の日、馬に乗るは志貴島の宮に天の下知らしめしし天皇の御世、天の下の舉國に風吹き雨零りて、百姓愁へき、その時に卜部伊吉若日子に勅して卜へしめ

給ひき、乃ち卜へて賀茂の神の崇なりと奏しき、仍りて四月の吉き日を撰びて祀り、馬には鈴を係け、人は猪の頭を蒙りて駢馳せ、以て祭祀をなし能く禱祀らしめき、因りて五穀成就りて天の下豊平なりき、馬に乗るは此に始れり。

猪の石像

『出雲風土記』には、宍道の郷の猪の石像のことが載せてある、曰く

宍道の郷、郡家の正西三十七里なり、天の下造らしし大神の命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つあり、(一つは長さ二丈七尺、高さ一丈、周り五丈七尺、一つは長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺)猪を追ひし犬の像、(長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺)猪と犬と異なることなし、今に至つても猶在り、故、宍道といふ。

文中の『天の下造らしし大神』は大己貴命のことである。

伊夜の丘

猪と犬との闘ひに就いては、『播磨風土記』にも左の文字がある。

伊夜の丘は、品太の天皇の獯犬(名はまなしろ)、猪と走りて、この岡に上りき、天皇見そなはして、『射よ』と宣り給ひき、故、伊夜の岡といふ、この犬と猪と相闘ひて死にき、すなはち墓を作りて葬りき、故、この岡に犬の墓あり、阿富山、枋を以ちて穴を荷ひき、故、阿富と號く、高瀬の村といへるは高き川の瀬に因りて名となす、目前田は天皇の獯犬、猪のために目を打ち害かえき、故、目割といふ、河多加野は、品太の天皇この野に狩し給ひしに、一つの猪、矢を負ひてあたきを爲しき、故、河多加野といふ。品太の天皇は應神天皇である。

大野の里

大野の郷は『出雲風土記』にある。和加布都努志の命、御狩しましし時、この郷の西の西に狩人を立て賜ひて追はしし猪、北の方の山の河内の谷に至りてその猪の跡亡せき、その時詔り給ひし、自然なるかも猪の跡失せぬ」と詔り給ひき、故内野といふ、然るに今の人猶誤りて大野と號るのみ。

野猪五題

宇佐の神猪

さるほどに八幡宮、帝の御夢にみえ給ひて『わが國は昔よりたゞ人を君とする事はまだなき事なり、かくよこさまなる心あらむ人をばすみやかに拂ひのくべし』とのたまはせしを、道鏡ききて大きにいかりをなし、帝をすすめ奉りて清磨を御使にて宇佐の宮へこの事を申し請はしめ奉らせ給ひしに、託宣し給ひし御言葉みかどの御夢に、いささかもたがはず、清磨『この御事は、きはまりなき大事に侍れば御託宣ばかりにては信じ給ふ事かたかるべし、猶そのしるしをあらはし給へ』と祈り申ししかば、すなはち御容をあらはし給ひけるが、御丈三丈ばかりにて望月の如く光りかがやき給へりき、清磨はきこたましひもつて、えをがみ奉らざりき、この時重ねて託宣し給はく『道鏡へつらへる心にてさまさまの神たち幣帛を奉り世を亂さむとするなり、われ

天つ日嗣のよわくなりゆく事をなけき、悪しきともがらのおこり出でむとする事を憂ふ、

われ佛の力を仰ぎて、みかどの末を助け奉らむと思ふ、すみやかに一切經をかき、佛像を造り、最勝王經一萬卷をよみ奉り一つの伽藍をたてて、この悪しき心あるともがらを失ひ給へと申すべし、この事一言もおとすべからず』とのたまはせき、清磨かへりまゐりて、この由を申ししかば、道鏡おほきに怒りて、清磨が官をとり、よほろすぢを断ちて大隅の國へながしつかはしき、清磨かなしびをなして、輿にのり、宇佐の宮へ参りしに猪三萬ばかり出で來りて道の左右にあゆみつらなりて、十里ばかり行き山の中へ走り入りき、かくて清磨宇佐に参りつきて拜し奉りしに、きられし所の睡いえてけり。——水鏡——

猪頭和尚

整沙門志蒙徐氏、衣錦衣喜食猪頭、語

人灾祥無不驗、人呼爲三小舅、自號曰三徐姊夫、一日坐化于三衢吉祥寺、遺言吾是定光佛、至是奉眞身、祈禱神廳不歇、世目之猪頭和尚。——佛統紀四五——

應舉と猪

或時應舉に臥猪の圖を乞ふ者あり、應舉未だ目のあたり野猪の臥たるを見ざるに、幸ひ矢背より老婆薪を負ひ、我が家に來る、此事を問ふに山中にては、たまたま見ることありと答ふ、因て托して云、汝かさねてこれを見れば早く來りてわれに告よかし、厚く賞すべしと云やりけるに、月餘ありて老婆が家のうしろなる竹林中に野猪來り臥す、老婆是を見るより速に京へ來りかくと告げれば、舉が云、汝まつ歸りて必ず驚すべからずとて遽に門人兩三輩を從へ矢背に到れば、野猪はなほ竹中に臥居たり、舉、直に筆をとりてこれをうつし老婆に厚く物などとらせ其夜吾家に歸る、其後これを寫眞して後又鞍馬より來る老翁に臥猪のことを問ふに、山中常に見ると云、因て、畫く所の圖をもて示しければ、老翁こ

れを見て畫はよしといへども臥猪にはあらず必病猪なりと云ふ、舉おどろきて其故を問へば臥猪は安睡の中といへども其態度おのづからいきほひあり、僕山中にして病猪を見るに實にこの畫のごとしといひければ、舉はじめ

て曉りて老翁に臥猪の形容を具に問ふ、翁これを説くこと甚詳なり、これに因て舉さきの畫所をすてて翁の口傳によりて改め寫す、後又矢背の老婆にさきに見る所の野猪を問へば、老婆云、惟むべし、彼野猪聖朝竹中に死たりと告ぐ、舉、是を聞きいよ、老翁が云しと感じ、ふた、び老翁の來る時、後に圖する所の幅を示しければ、是ぞ眞の臥猪なりとて驚嘆せしとなり。——近世名家書畫談——

摩利支天

摩利支天は、梵語 Marici、其形見るべからず、取るべからざるを以て陽炎と譯す、佛教の神、護國の神、天女の形相にして常に日の前に在りて自在の通力を有し、兵戈を救ふものといふ、故に武士の守護神とす、一説に三面八臂にして忿怒の相をなし、大威徳明王を一

面にし團扇と鉢とを持ち、豕を踏む、後世の案出に係る。——大言海——

猪を日本にて古よりいのこと訓ず、豕をい」と訓ずる故、いの生みける子ゆへいの子といふ、いづれの世よりか、豕をぶたと稱し猪の字をいのししの文字に用る事となりぬいのししは、此の豕の形に似て猛き事は獅子に似たる故、いのししといふか、猪をいのししに用る事しかるべからず、いのししは唐本草に載せたる野猪なり、西土にても豕は上古よりあり、野猪は唐に及んで本草にも載せたり、日本にて摩利支天の像を畫がき、或は木を以て彫刻せるを見るに、野猪に乗りたる所を著す、是は西土の佛經等に猪に載るといふ記文を見て日本人のししと心得ての事なるべし、殊にいのししは猛獸なるゆへ、軍神の威を示めさむが爲めの心か、心得がたし、狩野氏青白齋といへる畫業の者、異邦より將來せる摩利支天の木像を見たりとて、畫にうつしけるを予見侍りしに、其の騎れる所の獸は全く日本に今いふぶたなり、是にて多年の疑を解きぬ

豈軍神のいのししのごときの猛を頼まんや豕に乗る事、天部翼記といへる書にも其事を載す、軍家者流祕するといへる故ここに略す。——古今沿革考——

明恵上人と靈猪

明恵上人、一夜堂外を徘徊するに、西方に群猪あり、背に五大星を負ひ、光明燦爛として東に向ひて過ぐるを見る、又夢に明妃告て曰く、明日汝に般若理趣分を授けんと、翌年壇上に理趣を誦するの音あり、其の聲微妙、因てこれを記筆す、又不動の法を修すれば、忽ち道場變じて寶苑となるを見る、一同耳を聆りて佛眼に供す、其血、像壇及び供器に洒ぐ、夜夢に梵僧謂て曰く、三世の諸佛悉く身を布施す、子今之に庶幾しと、或は華嚴を讀みて如來自在他自在天宮十地法門と云ふ所に至れば、夫の莊嚴の相、忽然として現はる又眼を擧ぐれば、文殊大士が金毛の獅子に乗り、空中に現し光明赫奕たるを見る。

——元亨釋書——東國高僧傳——

隨筆の猪

五月白の古猪

徳廟小金御狩のとき、御まぶしの處に五月白と云へる古猪いでて向ひ來る、この猪は年歴たるものにて、鼻尖に白色を生じ、背には小木生じて花の白く咲るよりこの名を負しと云ふ、それほどの猪の荒立たるなれば、人皆懼るゝこと甚し、然るに徳廟には十文目の御筒を以て打たせらるべき御様子ゆゑ、御側に在る人々危みて各御前に立ち塞り、これを障ぎり止めんとせしに、はややごろを越へ間近く人々を衝て入るを、徳廟はやくも御筒を振舞給ひ、したたかに猪頭を御搏なされしかば、流石の猛獸もこれにひるみて一廻りせし所を人々折重つて仕留たるとぞ、この時御側等の人々君の御勇力を賞歎せしかば、上意に是程のことをのみ有て御誇なされし御氣色も無かりしとぞ。

この背に小木を生ぜしと云は、猪の類山獸

は總じて潤泥を以てその背を冷やす、これを二夕と云ふ、この泥自から身毛に留つてこれに木生ぜしなり、因てその年を経たる者知るべし、本綱云、野猪能掠_三松脂_三曳_三沙泥_三塗_三身以禦_三矢也とあるも是事なり。

松浦靜山——甲子夜話——

撻猪老士語

前左將監藤原武盛入道(家人村田隨身なり)かたりしは、寶永のはじめつかた、相國寺のあたりに、としよるまで劍術ををしへて世を渡る士あり、たけもひくきやせからびたりければ、いかにもさせるわざもあらざるよし人いひあへり、しかるに、かの士、あさとおきて、門にたゝすみけるに、はからずも手負けるあら猪のかけきたり、逃ぐべきやうもあらざりければ、もちたる杖にて一打にうちけるに、杖はほそかりければ、ふたつに折れけり、ゐのししはかしの骨をうちくだかれ、

つひにたふれぬ、これを見て日ごろ心ゆかすおもひけるものも、今かく年老いても年來の習練むなしからざる事を感じしとなり。

柳原紀光——閑窓自語——

伏猪床

おのが弟子岡野義和、天保七丙申年、おほやけのおほせかしこまりて、奥州磐城郡上小川村の地の内字遠山と呼ぶ處の御林山を見に行けるに、小川村より此山迄凡二里餘、御林山四里四方といふ、人跡絶たる處にして、谷など所々に有り、折しも卯月の事なりければ、夏草たかく生繁り、熊笹ひまなく生たり此山にはもみの古木多く、晝もをぐらし、かく繁りて此世の中とも不覺、其木のもとに疊二枚程になして、めぐりの縁は熊笹を喰切て三四寸許りに高く積上げ、其うちほさまゝの草の葉を厚さ二寸斗に敷て、其かたち飯櫃のさまに作りたり、是を道しるべの村長(名は長藏)に尋ねければ、是なん伏猪の床也といへり、此山中に唯二ヶ所を見たり、かるもかく伏猪の床と詠るは是なり、と義和かたり

ぬ、歌には拾遺集に

かるもかき伏猪の床も寝をやすみ、さこそねられめかゝらずもかな

と見ゆ、和訓栞に、猪はおのが臥床にかるも搔敷て敷といへり、心やすくぬぬものなれば歌には多く其意を詠り、かるもは枯物の義なるべし、刈藻の意にては通じがたしと見ゆ。

天野政徳隨筆——

去猪子宮

唐人、雌猪を大木に繋ぎ、股の傍を小刀にて五分許切入て、長さ一尺計の鐵の火箸の如くなる者、其先曲たる物を入れて、しきりに臍臍を引出して幾度も見て白き物を一寸計を見付け切取り、俗に兒袋と云、此痕を木綿針に木綿糸を貫き横にぬひ、其上に罇墨を附けて其上に又荏油を塗り、其縛りたる索を解く、此時は地に倒て立がたし、一二時にして漸く動き、其日の中に何の痛もなき様子なり、此兒袋を切る時は、淫事を忘れて、いつまでも小兒の心にて、よく肥て其肉甘柔なり、しかざれば、老して肉硬しと云、又雄猪の睾丸

を切るも此仕方たり、睾丸を切れば大に肥て其味其だよし、又其尻の肉を切て食し、又本の如く肉生ずれども其肉硬くなりて宜しからず。

佐藤成祐——中陵漫錄——

取猪血法

唐人は羊を殺すことを忌む、羊は靈ありと云ふ、猪の睾丸は食すれども、羊は食ふ事なし、猪を殺すに咽に少し切口を付て腰掛の様なる物の上に載せ、其腹をもみ推して其切口より血を出し、器物に受、血盡て自死す、是を切解なり、其血一宿する時は、凝て羊肝の如し、是を生にて箸にて切て食す、又諸の煮物の内に入る、甚だ美なりと云ふ、餅等には育したる猪は必しも用ずと云ふ。

同書——

猪兒の生焼

阿蘭陀人の庖厨を『コンバニヤ』と云ふ、是も『コンボリーコス』と云を誤てコンバニヤと云ふ、此庖厨にて猪の兒を活ながら四足をくびりて炭火の上に釣りて生焼として大抵に焼たる時を見て切解くなり、日本人是を見るに

忍びすと云ふ、又羊を逐て索にて引き『コンバニヤ』にいれ、水にてよく洗ひ板に載せ兩傍に黒子二人にて經を讀む、其間羊少しも動く事なし、涙を垂ると云、日本人は誰も見ることなし、定て切解くなるべし。

同書——

編者註 中陵漫錄の此説、猪の文字を用ふるも、これは家豚の事らしい。

野猪、和名久佐井奈岐、俗云井乃之、

本綱野猪、有_三深山_三形如_三猪但腹小脚長毛色褐或黃、作_三群行_三、牙出_三口外_三如_三象牙_三、其肉有_三至_三三三百斤_三者、能與虎鬪、或云能掠_三松脂_三曳_三沙石_三塗_三身以禦_三矢也、最害_三田稼_三亦啖_三蛇_三虺_三、獵人惟敢射_三最後者_三、若射中_三前者_三則散走傷_三人_三、肉、甘平治_三癩_三補肌膚益五臟(青蹄者不可食忌_三巴豆_三)其肉赤如馬肉食之勝_三家豚_三牝肉更美。

按野猪怒則背毛起如_三針_三、頸短不能_三顧_三左_三右_三、觸_三牙者無_三不_三摧破_三、如爲獵人被傷去時人嘗謂_三汝卑怯者蓋遠乎_三、則大忿怒直還進對合與人決_三勝負_三、故譬_三之_三猛勇士_三、惟突傷鼻及腋則斃。

寺島良安——和漢三才圖會——

萬葉集に現はれた猪

長皇子獵路地に遊び給へる時

柿本朝臣人麿の作れる歌

やすみしし、吾大王、高光る、わが日の皇子の、馬並めて、み獵立たせる、弱薦を、獵路の小野に、猪鹿こそは、い匂ひ拜がめ、鶉こそ、い匂ひもとほれ、猪鹿じもの、い匂ひ拜がみ、鶉なす、い匂ひもとほり、かしこみと、仕へ奉りて、ひさかたの、天見るごとく、眞十鏡、仰ぎて見れど、春草の、いやめづらしき、わが大王かも。(三卷)

挽歌

かけまくも、あやにかしこし、わが王、皇子の命、武士の、八十伴の男を、召し集へ、率ひ賜ひ、朝獵に、鹿猪踐み起し、暮獵に、鶉雉履み立て、大御馬の口抑し駐め、御心を見し明らめし、活道山、木立の繁に、咲く花も、移ろひにけり、世の中は、斯くのみならし、丈夫の、心振り起し、劔刀、腰に取り佩き、梓弓、鞆取り負ひて、天地と、いや遠長

に、萬代に、斯くしもがもと、憑めりし、皇子の御門の、五月蠅なす、騒ぐ舍人は、白袴に、服取り着て、常なりし、咲ひ振舞、いや日に、變らふ見れば、悲しきろかも。(同)

獵

やすみしし、わが大王は、み芳野の、蜻蛉の小野の、野の上には、跡見居る置きて、み山には、射部立て渡し、朝獵に、鹿猪履み起し、夕狩に、鳥踏み立て、馬並めて、御獵ぞ立たす、春の茂野に。(六卷) 山部 赤人

旋頭歌

江林に宿る猪鹿やも求むるによき白妙の袖纏み上げて猪鹿待つ我背。(七卷) 柿本 人麿
物に寄て思を陳ぶ
高山の岑行くししの友を多み袖振らず來つ忘ると念ふな。(十一卷) 柿本 人麿

陸奥歌

安太多良の宿に伏す鹿猪の在りつつも吾は到らむ瘴處な去りそね(十四卷) 作者 未詳

妹をこそあひ見に來しか眉曳の横山邊ろの鹿猪なす思へる(同)

猪 狩 (句)

銃ぐちや猪一莖の草による 石鼎
猪打ちに蒜臭き泊りかな 不爲
猪獵や猪撃とめし夕笈 風可
猪に裂かれしあとや裘 夜白
此の籬猪の背擦りに傾けり 梧月
朝鮮や猪を煮るべき石の鍋 簪溜子
薄雪にきのふあたりの猪の跡 無錫
橋の下猪を卸してありにけり 青蕘
猪昇いで京都の街を通りけり 馬棚
陸奥はまだ冬や猪を賣る 青郵
猪おとし且の谿にひびきけり 鬼燈
猪狩の焚火してゐる山田かな 蟹舟
手負猪
炭竈に手負の猪の付けけり 凡兆
喰ひに來て田に喰る手負猪 貞徳

猪武者と玄猪

大夫判官は大物浦にて、大淀の江内忠俊を以て船捕して、軍の談義ありけるに、梶原平三景時申けるは、船に逆櫓と申物を立候て、軍の自在を得様にし候ばやと申けり、判官、逆櫓とは何を云事ぞと問給へば、梶原は逆櫓とは船舳に櫓へ向て櫓を立候、其故は陸地の軍は進退逸物の馬に乗て心に任せて懸るべき處をば蒐、可引折は引も安き事にて侍り、船軍は押早めつる後、押戻すはゆゆしき大事にて侍るべし、敵つよらば舳の方へ櫓を以て押戻し敵よわらば元の如櫓の櫓を以て押渡し侍らばやと申たりければ、判官、軍と云は大将軍が後にて蒐よ責よと云ふだにも、引退は軍兵の習なり、況兼て逃支度したらんに、軍に勝なんやと宣へば、梶原、大將軍の謀の能を申すは身を全うして敵を亡す、前後をかへりみず、向ふ敵ばかりを打取んとて鐘を知らぬをば猪武者とてあぶなき事にて候ふ、君はなほ若氣にて加様には仰せらる、にこそ申、判官

玄猪の事

玄猪の事、延喜式に出たり、天子の御前に

少色損じて不_レ知とよ、猪鹿は知らず、義經は只敵に打勝たるぞ心地はよき、軍と云は家を出し日より敵に組んで死なんとこそ存する事なれ、身を全うせん命を死なじと思はんには、本より軍場に出ぬには不_レ知、敵に組んで死するは武者の本なり、命を惜みて逃るは人ならず、去ば和殿が大將軍承たらん時は逃備して百挺千挺の逆櫓をも立給へ、義經が舟にはいま_ノしければ、逆櫓と云ふ事聞とも聞かじと宣へばあたりの近兵共是を聞て一度に咄と笑ふ、梶原、よしなき事申出でけりと赤面せり、判官は抑景時が義經を向う様に猪に喩ふる條こそ奇怪なれ、若黨ども景時取て引落せと宣へば伊勢三郎義盛、片岡八郎、武藏坊辨慶、判官の前に進み出で、既に取て引張るべき氣色なり。——源平盛衰記四十一——

て御通御盃相濟て、丸くちいさき餅を、御手自らはぢかせ臣下に給はる、公卿は黒く、四位は赤く、五位の官人は白きを給ふ、其夜不參の官人は長橋の局まで申出で頂戴す、餅に忍ぶの葉と菊の花をへ紙に包みて給はる、亥の日三度あれば、紅葉鴨胤の葉に相かはる、忍ぶの葉は毎度入る、也、俗にお玄猪と云ふ、此御儀式の説、諸書にのせられども、少々づつ違あり、此説は現に正親町公通卿の御説の急書とめ侍る。——卯花園漫録——

あつこ、亥子、又玄猪、十月の節日の稱、十月は亥に建す、其亥の日、亥の刻に上下餅を食ふ、之を亥子餅と云ひ萬病を除くと云ふ、或は云ふ、猪は多子なれば子孫繁昌を祝すと、古へ禁中にては内藏寮より奉り、嚴重の餅と云ふと云ふ。(玄猪の訛か) ——大言海——
二中歴、五節日由緒「十月亥子、群忌隆集云十月亥日作餅食之、其人無病也。」
看聞御記「應永二十四年十月十七日「今夜亥子也」」

小藤太からく〜と笑ひ、さて〜知れたる
賣女奴輩、おのれは正しく曾我兄弟の思ひも
の、大磯の虎、粧坂の少將、私ならぬ狩場の
妨げなすは上への狼藉、兄弟が爲する業、搦
め捕て御前へ引くと、哄と寄れば、なふ悲し
やと逃まどふ、弓手に寄れば矢先を捕へ、右
へ寄れば鎖襖、真中に取込られ、此處を大事
と手を取組、草を潜て行先も、暗きに沈む人
穴の、岸の土壇踏崩し、輾び轉んで逃げ入り
しは、術方なくぞ見えにける、サア心地よし
鳥兎の命を助け、却ておのれが身に報ひ、此
世の地獄に落たると、哄と笑へば小藤太頭を
掉て、いや〜此人穴、昔より入りたる者な
く、奥の案内測られず、萬一何處ぞに抜道あ
つて、助かり出で、曾我兄弟に斯くと語らば
後日の意恨晴すは必定、彼奴等兄弟日頃の
際氣味悪し、熊狼でも追込んで、喰殺させん
といふ處に、向ふのねがたどうどうと、俄に
瀧の落つるが如く、萱原笹原辻風起る其響き

幾年功経る猪の、猪矢三五本負ながら、眞下
りに落せしは、牛鬼なんとも謂つべし、父の
祐經大勢引具し、聲をかけ、矢先にては適ふ
まじ、大石枯木を投げかけ、縮めて捕れやと下
知をなし、八方より取巻て、木の枝、土壇、
手頃の石、雨の如くに投かくる、猪は怒つて
猛りをかき、牙を研ぎ鼻嵐を吹掛け、寄すれ
ばバツと退き、退けば續いてかゝり、追つ返
しつ揉合しが、飛菟めて雑兵二人、左右の牙
に引かけ、二三間ひらりと投げ、入穴さして
飛び入りしは、凄じかりける猛勢なり、祐經
穴を差覗き、あれ〜中にて吼る聲、未だ奥
まで行つかず、取返すは必定、穴の口に鎖
先捕へ突止めよ、承ると立並び、今や〜と
待つ所に、内より土風土烟、半臂に弓籠手狩
袴、大太刀佩たる武士の、猪の胴骨馬乗に、
頭を背後、尾筒を手綱に乗せながら、迂鳴出
でたる暴猪の、鏑も矢先も事ともせず、寄り
付くものを駈散らし、山を崩し立木を折り、

乗手は落じと締付ければ、猪は落さん〜と
谷に駈り尾上に飛び、眞なご混りの砂利土に
四足をかつぽと踏込んで、怯む處を指添抜き
既に突んと振上れば、祐經聲をかけ、ヤアヤ
ア猪に乗たるは仁田の四郎忠常な、もと其猪
は此の祐經が穴へ追込たり、然れば手柄は
二人の手柄、たとへ御邊が突止めても、先
の手柄は祐經ぞ、後日に前後を争ふな、其爲め
詞を番ふたと、いはせも果す、いや是れ前後
の争ひはいざ知らず、某は富士の人穴見て参
れとの仰を蒙り、先月二十八日洞に入り、今
日幾日は存せねども、我が心には半日の客
富士権現の御示現にて、冥途黄泉の状態、人
界三世未示し教へ給ひしが、今宵の中に富
士の裾野に事起り、工藤左衛門祐經が、一命の
終りなり、汝には一つの譽れを與ふべし、只
慈悲心を守れとのあらたに告を蒙り、立ち出
る半途にて、大磯粧坂の遊君虎少將、此の猪
に追詰られしを大権現の示しは此處ぞ、慈悲
の始め手柄の始めと、乗伏たる此猪、前後の
争ひあるべきか、先づ身の用心せられよかし
祐經殿といひければ、なに神巫山伏のいふや

うな、後の事を誰知らん、あれ小藤太突留て
奪取れ、心得たりと寄る處を、猪は四足をぐ
つと抜き、小藤太が左の高股膝節かけてさら
りとかげ、仁田を其儘乗せながら、唾も岨も
嫌ひなく、岩を蹴割つて飛で行く、祐經親子
は只今の、仁田の四郎が物語、疑はしくは思
へども、神の托宣氣懸に心浮ねば本意なげに
後を慕うて走りけり。——曾我虎が癖——

仁田忠綱

猪逆乗の事

頼朝卿の富士の狩に、仁田四郎が大猪に逆
乗して仕留たること世の口碑に存せり、其の
事、曾我物語に見えしは。

爰に伊豆の住人仁田四郎忠綱、未だ鹿に逢
ずして落くる鹿を相待ところに、幾年歴る
とも知らざる猪のししがふしくさかく〜ふ
しくさかく未詳十六つきたるが、主を知ら
らぬ鹿矢ども四つ五つ立つたりしが大きに
猛つて駆け廻はる、譬へば揚由が術許□□
が神變も及ぶべしとは見へざりけり、近着
者を猛れば落合ふ者も無くして徒らに中を

明けてぞ通りける、忠綱是を幸と馳寄せけ
り、御前近ふなりければ好しや仁田、好し
や忠綱とぞ仰下されける、人もこそ多き中
に筒様の御詫蒙ること生前の面目何事か
に如かんと存る間、鐵鋼を圍めたる猪なり
とも餘さじ者と思ひければ、大の鹿矢を
拔出し唯一矢にて彎て放つ所に、矢より
も先に飛び來り騎りたる馬を主共に空にす
くふて投揚げ、落ちばかけんと爲る所に協
はじとや思ひけん、弓も手綱も打捨て向様
にぞ乗移る、されども逆さまにこそ乗たり
けれ、猪は乗られて腹をたて、馬を彼しこ
へかけ倒し、雲と霞に分け入て虚空を飛ん
で廻りしは、周の穆王釋尊の教法を聞かん
とて八匹の駒に鞭を擧げ、萬里の道せつな
に飛びつきしも、是にはいかで勝るべき、
仁田は習し手綱のやう腰も切れよと抜みつ
け、尾筒を手綱に取、らくこんに傳へし三
かしら、王良が秘せし手綱是なりけりと、
こらへけれども爲ん方なくぞ見へたりける
猪は彌々猛りをかき、木の本茅の下岩巖石
を嫌はずして空に飛で廻りしかば、烏帽子

竹笠行膝一度にきれて落にけり、大童に成
て唯落じとばかりこらへける、大きに猛き
猪のししも餘多手は負ぬ仁田が威にや押さ
れけん、御前近き枯杭に蹴きよわる所にあ
やまたず、腰の刀を抜き胸中に突立て肋骨
二三枚かき切ければ、猪は四足を四五寸土
に踏入て立すくみにこそ成にけれ、仁田は
急ぎ飛下りて數の留めを刺す、上下の狩人
是を見て前代未聞の振舞哉、面白くも止め
たり乗りも乗たりこらへもこらへたりと感
ぜぬ人こそ無かりけれ、君も此由御覽じて
狩場の中の高名は是に如かじと御感ありて
富士の下方にて五百餘所を賜はりけり、勢
ひ餘りてぞ見へし。

忠綱時に廿七とぞ見えし、又似たる事の知不
足齋叢書中にあるは、江南餘載に、保大中太
平府聶氏女年十三歳、母爲虎攫去、女持刀跳
登虎背、連斫其頸、虎奮跳不脱、遂斫虎、乃
還家葬母屍、是の如くなれば、猛獸と雖も、
その急處を取られては勝こと能はず、又保大
は五代の時、江南僞唐の二主李璟即位改元保
大。

——松浦靜山——甲子夜話——

猪の名畫

猪で直ぐに想ひ起されるのは、摩利支天の猪と富士牧狩の猪である、摩利支天の猪は豕であるともいひ、又、後世これを附けたものともいふ、それかあらぬか、摩利支天像も極く古いものには猪が描かれてゐない、富士の牧狩は、兎も角も鎌倉時代に於ける一の壯舉であつたし、背景が富士といふ雄大さに加へて仁田四郎の勇武や、曾我兄弟の復讐などといふ景物があつたりしたので、彌が上にも人口に膾炙されるやうになつた、従つて富士牧狩屏風は數點傳へられてゐる、大阪の菅沼正俊氏藏無款の六曲一双、群馬の下山觀三郎氏藏同無款の屏風、それから高久隆古にも之を描いた大作があつて、何れも野猪を止める處が中心になつてゐる。

唯に猪の描かれたもので古いものでは、高山寺の『華嚴緣起繪卷』の一節にそれがある。第六卷目に當る元曉の卷で、元曉が市井の乞

食に交りて經の分類を頼む處、市場があつていろ／＼の品を持ち込む、此の處に猪を二三頭曳いて來るのもある、中々よく描かれてゐる。

猪といへば又直ぐに圓山應舉が、八瀬の村で病猪を寫した物語が聯想されるが、狙仙に素晴らしい野猪の圖がある、京都の西村總左衛門氏の所藏で、二曲半双、萩や齒菜や秋草の草に猪が躡蹠してゐる、その寫生實に迫り非常に上品に描かれてゐるが、源豐宗氏は此の猪に對して『唯此の圖を見る時、かの應舉が八瀬で寫した猪が病猪であつたといふ有名な逸話が、むしろ狙仙が此の圖を畫いた時の謬りであつたらうと思はれる程に精悍さを缺いで、もの憂げに横つてゐる』といつてゐる。

徹山にも野猪の圖があり、これは狙仙の筆の精緻なのに比して、甚く荒削りであるが猪の生氣は却つて此の方にあるといへやう、應

舉は十二支屏風一双の中に、かなり寫生的にこれを描いてゐる。

變つた方では、冷泉爲恭と稱するものに秋草野猪の圖がある、秋草の咲き亂る、中に、二頭の野猪が疾走する處を描いたもの、美しくはあるが野猪の生氣に乏しい、これは曾て大岡親海居士の所藏であつたといふ、又江川坦庵にも猪の作がある、坦庵は繪をよくしたがこれなどは代表的名作この外野口幽谷にも猪一頭畫面一杯に描いた作があり岡本秋暉にも萩に猪の一圖がある、現代の人々はあまり猪などを畫かない、唯竹内栖鳳氏に、その作が二三ある、何れも例の洗練圓熟の筆でこれを描いてゐるし。

猪狩といふことは、日本ばかりでなく、外國でも随分古くから行はれてゐたものであるから、古代藝術には往々これを散見する、ベルシャのターク・イ・ブスタンと呼ばれる記念浮彫の中には、有名な猪狩の圖があつて、葦の茂つた湖畔で王が舟に乗り狩獵を樂しむ、網を廻らした狩野には象に騎つた家臣等が隊をなして獲物の猪を追ひ込んでゐる處が、面白く寫されてゐる。

野猪の和歌

君こふとるのかるもより寢覺してあみける
ぬたに憔悴てそふる 俊頼 朝臣
春ののにいさ思ふとちをかやふくあますの
下にのこふしせん 源 仲正
てる月に萩のもとあらもしたはれてけきよ
く見ゆる斑猪のふし 同
おとろかぬ伏猪のこのねふりかなさらにも
も夢にすくる此世を 後京極攝政
落つもる木の葉も幾重うつむらんふす猪の
かるもかきも拂はて 定 家 卿
戀をしてふす猪の床はまともまでぬたうち
さます夜半の寢覺よ 待賢門院安藝
秋の野のかるもか下に月もりてならび伏猪
の影もかられず 法性寺入道關白家三川
おく山のふす猪の床やあれぬらんかるもも
たえぬ雪のした葉は 後鳥羽院御製
うちたえてさのみふす猪の床つめにかるも
の亂れ朽や果なん 俊實 朝臣
さえわひてふす猪の夢やさめぬらんかるも

の床に霞ふるなり 前大納言忠良卿
はた山のをのへつつきたか、やに伏猪あり
りやと人とよむらん 爲 家 卿
いかにせん伏猪もしらぬ浪の上もあまのか
るもになほみだれつ、 從二位家隆卿
千よろづの仇にむかひて走猪のかへり見せ
ぬ心ともがな 橘 千 蔭
ふみ迷ふ富士の裾わの真かや原あら猪のか
よふ道はみえけり 上田 秋成
こころのみみ山の奥に走れどもよに繋がる
、身をいかにせん 熊谷 直好
なを呼べば鹿も猪もおなじしなれど姿心
は似るかたもなし 大隈 言道
怒り猪の石をくくみてかみこしはきさのき
にこそ考らざりけれ 仙慶 法師

俳句

若水やおよそ玉川猪のかしら 白 雄
猪のくびのつよさよ今朝の春 凡 兆

猪に嗅がれて落つる椿かな 蓮 谷
五段目猪承りぬ年男 紅 葉
人音に猪のにけ行く清水かな 吏 登
のち猪の眞葛わけ入る清水哉 成 美
猪のみだる、形や月の雲 土 芳
猪のともに吹かる、野分かな 芭 蕉
初露や猪の伏す芝の起上り 去 來
猪におとし穴して住ふなり 一 川
猪の庭ふむ音や木の實降る 太 祇
猪の床にも入るやきりぎりす 芭 蕉
猪の鼻に苗代水や吹きあれし 尙 白
猪の寝に行く方や明けの月 去 來
猪のたぬき寝入や鹿の戀 蕪 村
松が根の蔦に身をすする猪子哉 白 雄
猪の露折りかけて女郎花 蕪 村
木枯や猪の來てふむ背戸の芝 蒼 虬
猪喰ひに栗を喰つ、夜語りす 青 々
稻刈りて猪まつ小屋は荒に鳧 同
猪の靜かな年や粟ばたけ 丈 草
猪に誰かけられし夕しぐれ 白 雄
猪の倒しふみけり雪のはら 闌 更
猪の篠根掘食ふかれ野哉 白 雄

熊の種類と概説

クマ属

クマ属は北半球に分布し南限は舊世界にてはアトラス山脈及マレー群島、新世界にてはアンデス山地に在り、多くは深山幽谷に住めども、沿海地に居るものあり、水を泳ぐ事も木に攀づる事も巧妙なり、雑食性なれども何れかと云へば食肉性勝りたらん、普通の種類に就き知らるゝ所よりすれば、妊孕半年に互り、一産一―三頭を分娩す、分娩時の幼仔は存外小形、且つ旨にして裸體なり、クマ類は一般に平常は鈍重にして温厚なれども其身の安全を得んが爲めには不思議に敏捷なりと稱せらるゝを以て此類多き地方の士及狩獵家は此點に注意すべきならん。

クマ属は厚く粗き毛皮の所有者にして他の食肉目と異なる點多し、其體は肥大にして頗る重く、四肢は短くして太し、常に蹠行す足は地面を掘るに適す、(主として食物を掘

出す)五趾あり能く發達せり、爪は長くして曲れり、引込むこと能はず、尾は甚だ短し、耳は立てども短く丸くして有毛、乳房は三對あり、齒式は門3犬11前4臼3²後4²、後方の臼齒は根物食に適せる如き形を爲せり、本属は學者に依り數屬とせらるゝも、日本産に就ては精密なる調査なきを以て暫く單に亞屬名として引用するに止む。

クマ

ツキノアケマ

本州一圓のみに産す、深山の森林に棲息し他の哺乳動物の穿ちたる地中の窟を以て居となし自らの窟を作るために孔を穿つ事無し、冬も蟄せず、雑食性にして魚類カニ等を食べ、冬春の交に際してはハチ、アリの巢を發きて巢と共に夫等の昆蟲を食す、又ヤマブドウの果實を食ひスギの樹皮を剥ぎて靱皮より出づる所の汁液を吸むることあり、一年一産五月頃一―二仔を分娩す。

體の大きさは頭胴一四〇〇―一六五〇ミリメ

ートル内外、後足一九五―二二〇ミリメートル、耳(毛を除きて耳介を頭頂の方より測る)一四〇ミリメートル内外あり、冬毛は滑かにしてあまり長からず、但し肩の所にてはや、長し、羊毛狀の不毛を有せず、耳は稍々大なる方にて長毛を有せり。

色彩、殆ど全身黒色爪も亦黒し、所謂クマの如きなり、但し胸間に月の輪と俗稱せらるる白斑あり、肉は食用に供す美味なり、膽囊は古來熊の膽と稱し藥用に供せらる、其毛皮は敷物又は單に座褥として賞用せらる。

ヒグマ

エゾヒグマ

ヒグマは北海道一圓に産す、往々アカクマと混同せらる、蔚蒼たる森林又は高山の脊梁に多く岩石の裂罅、洞穴、大木のくほみ等に棲む、冬季は洞窟に蟄居して食はず、此間にネズミ大の小さき仔獸一―三頭を分娩す、一年一産、仔は五年にして成熟すれども生長は尙十數年繼續すと云ふ、交尾期は六七月の交にして妊孕期間は約三十週間なり、夜行性なれども夏秋の候には晝夜の別無く出沒往來す、水を泳ぎ樹を攀づる事巧なり、雑食性にして魚

類(冬季はサケの如きもの)カニ及アリの如き動物性のもの、外、野生の果實特に多少の酸味あるノブドウ類及漿果を好み、又、タウモロコシ等を栽培せる畑を食荒し、殊に初夏に於ては牧場を襲ひて牛、馬、豚を捕去ること稀ならず、青物採集者樵夫などの危害に會ふことも珍しからず、殊に被害多きは空腹時、交尾期、仔獸を伴へる時季なりと云ふ。

體は甚だ大きくして頭胴二一〇〇ミリメートルを超ゆるものあれども多くは一五五〇―一八〇〇ミリメートル、尾六五―七五ミリメートル、を算す、冬毛にて毛は長く内地のクマよりも粗鬆の感あり、耳には長毛あり但し軟き羊毛の下毛を有す、夏毛は色濃く短し。色彩、淡き赤褐色を普通とすれども往々多少の灰色を帯べるものあり、爪は大抵色淡白し、幼仔及牝は牡に比すれば往々淡し、幼時は一般に輪廓不明の月の輪あり、肉と脂肪とは食用に供せられ膽囊は品質劣等なるも尙藥用と爲す、毛皮は敷物寝具手袋等に利用す。

アカクマ

クロクマ

アカクマは國內に在りては樺太に産し、國

外に在りてはカムチャツカ、シベリアより歐洲北部に亘りて棲息す、北米に産する *Ursus arcticus* も恐らくは同一種ならん。

習性、ヒグマに似たる點多し。體はヒグマより更に大きく、牡にては頭胴一九〇〇ミリメートル、尾八〇ミリメートル、後足一九五

ミリメートル、耳九〇ミリメートルを算するものあり、耳は小さき方にて毛にかくる位なり、耳端は丸し、前に折返すも眼に届かざる位なり、尾も體の毛にかくる、程の大きなり、毛は長く且つ稍々密ならず。

色彩、淡褐色又は少しく黒みたるパツフにして頭も胴と同じ色を呈せり、但し四肢は頭胴よりも濃く且つ外面に於て然り、又各肢中にては下部は次第に濃し。

肉は食用に、皮は敷物等に用ひらる。

ホクキヨクグマ

シグマ 白クマ

ホクキヨクグマは國內に在りては、千島に産し、國外に在りてはカナダ、アラスカ、ユーラシアの北極圏内及之に近き海岸に分布す此外日本に於ては、越後の近海にて生擒せられし記録あり、海邊の洞窟又は岩礁の裂罅に

棲む、食餌はアザラシを嗜好し、其他の獸類鳥及其の卵、腐肉、魚等にして、植物性のもとしては僅かにイチゴの記録あるのみ、水を泳ぎ、又は潜行する事巧みなり、蕃殖状況明かならざるも、仔を伴へるものを見し人の想像に依れば、一年一産にして一産に二仔を分娩するものならんと云ふ。

體はクマ類中最も長く往々四メートルに近きものありと云ふ。Meier氏のペーリング海峡産の一牡を測れる所に據れば、頭胴二六七〇ミリメートル、尾九〇ミリメートル、後足三七〇ミリメートル、耳八〇ミリメートルの例あり、此は寧ろ小さき方ならん、アカクマよりもほそやかにして頸長く、頭は長く且つ尖れり、爪はやや太く曲りは弱し、但し端の尖りは強し、毛は短く頗る密にして、夏毛の如きはラットセイを髣髴せしむ。蹠には長毛あり。

色彩、全身白又はパツフ、冬毛はクリーム白色、夏毛は黄を帯べるパツフと云ふべし、爪は黒色なり、以上の外朝鮮にはテウセンクマ、臺灣にはタイワンクマを産す。

―農林省―哺乳動物圖解―

北越雪譜の熊

熊捕

越後の西北は大洋に對して高山なし、東南は連山巍々として越中上信奥羽の五ヶ國に跨り、重岳高嶺肩を並べて數十里をなすゆる大の獸甚多し、此獸雪を避て他國へ去るもありさざるもあり、動かずして雪中に穴居するは熊のみなり、熊膽は越後を上品とす、雪中の熊膽はことさらに價貴し、其重價を得んと欲して春暖を得て雪の降止たるころ、出羽あたりの獵師ども五七人心を合せ、三四疋の猛犬を牽き米と鹽と鍋を貯へ、水と薪は山中在るに隨て用をなし山より山を越、晝は獵して獸を食とし、夜は樹根岩窟を寢所となし生木を燒て寒を凌ぎ且明となし、着たまゝにて寢臥をなす、頭より足にいたるまで身に着る物悉く獸の皮をもつてこれを作る、遠く視れば猿にして顔は人也、金革を衽にすとはかゝる人をやいふべき、此者らが志す所は我國の

熊にあり、さて我山中に入り場所よきを見立木の枝藤蔓を以て假に小屋を作りこれを居所となしおのゝ犬を牽き四方に別て熊を窺ふ熊の穴居したる所を認ば目職をのこし小屋にかへり、一連の力を併てこれを捕る、その道具は柄の長さ四尺計りの手鎗、或は山刀を薙刀の如くに作りたるもの、鐵砲山刀斧の類なり、又鈍る時は貯へたる砥をもつて自研ぐ、此道具も獸の皮を以て鞘をなす、此者ら春にもかぎらず、冬より山に入るをりもあり。

そも、熊は和獸の王、猛くして義を知る菓木の皮蟲の類を食として同類の獸を喰はず田圃を荒さず、稀に荒すは食の盡たる時なり詩經には男子の祥とし、或は六雄將軍の名を得たる義獸なればなるべし、夏は食をもとむるの外山嶽を掌中に擦着、冬の藏蟄にはこれを甜て飢を凌ぐ、牝牡同く穴に蟄らず、牝の子あるは子とおなじくこもる、其藏蟄たる所は大木の雪類に倒れて朽たる洞又は岩間土穴

かれが心に隨て居る處さだめがたし、雪中の熊は右のごとく他食を求めざるゆるゑ、その膽の良功ある事夏の膽に比れば百倍なり、我國にては飴膽、琥珀膽、黑膽と唱へ色をもつてこれをいふ、琥珀を上品とし黑膽を下品とす偽物は黑膽に多し。

さて熊を捕に種々の術あり、かれが居所の地理にしたがつて捕得やすき術をほどこす、熊は秋の土用より穴に入り、春の土用に穴より出るといふ、又一説に穴に入りてより穴を出るまで一睡にねむるといふ、人の視ざるところなれば信じがたし。

沫雪の條にいへるごとく、冬の雪は軟かにして足場あしきゆるゑ、熊を捕は雪の凍たる春の土用まへ、かれが穴よりいでんとする頃を程よき時節とするなり、岩壁の据又は大樹の根などに藏蟄たるを捕には壓といふ術を用ふ天井釣ともいふ、その制作は木の枝藤の蔓にて穴に倚掛て棚を作り、棚の端は地に付て杭を以てこれを縛り棚の横木に柱ありて棚の上に大石を積ならべ横木より繩を下し繩に輪を結びて穴に臨す、これを蹴綱といふ、此蹴綱

に轉機あり全く作りをはりてのち穴にのぞんで玉蜀烟草の莖のるい熊の惡む物を焚、頻に扇て烟を穴に入れば、熊烟りに噓て大に怒り穴を飛出の時必ずかの蹴綱に觸れば、轉機にて棚落て熊大石の下に死す、手を下さずして熊を捕の上術なり、是は熊の居所によるなり、これらは樵夫も折によりてはする事なり。

又熊の場敷を踏たる剛勇の者は一連の獵師を熊の居る穴の前に待せ、己一人ひろろ蓑を頭より被り(ひろろは山にある草の名なり、蓑に作れば稿より輕し獵師常にこれを用ふ)穴にそろゝと這入り熊に蓑の毛を觸れば熊

はみの、毛を嫌ふもの故除て前に進む、又後より蓑毛を障す、熊又前に進む、又さはり又進んで熊遂に穴の口にいたる、これを視て待かまへたる獵師ども手練の槍先にかけて突留る、一槍失ときは熊の一搔に一命を失ふ、その危を踏で熊を捕は僅の黄金の爲なり、金慾の人を過事色慾よりも甚し、されば黄金は道を以て得べし、不道をもつて得べからず。

又上に覆ふ所ありてその下には雪のつもら

ざるを知り土穴を掘て蟄るもあり、然れどもここにも雪三五尺は吹積なり、熊の穴ある所の雪にはかならず細孔ありて管の如し、これ熊の氣息にて雪の解たる孔なり、獵師これを見れば雪を掘て穴をあらはし、木の枝柴のるるを穴に挿入れば、熊これを搔とりて穴に入るゝ、かくする事しばゝなれば穴通りて熊穴の口にいつる時槍にかくる、突たりと見れば數匹の猛犬いちどに飛かかりて嚙つく、犬は人を力とし、人は犬を力として殺もあり、此術は控木にこもりたるにもする事なり。

白熊

熊の黒は雪の白がごとく天然の常なれども天公機を轉じて白熊を出せり。

天保三年辰の春、我が住む魚沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫八海山に入りし時、いかにしてか白き兒熊を虜り世に珍しとて飼おきしに香具師(江戸にいふ見せもの師の古風なるもの)これを買もとめ、市場又は祭禮すべて人の群る所へいでて看物にせしが、ある所にて余も見つるに大き狗のごとく狀は全く熊に

して白毛雪を欺きしかも光澤ありて天鷲織のごとく眼と爪は紅なり、よく人に馴てはなはだ愛すべきものなり、ここかしこに持あるきしが、その終をしらず、白龜の改元、白鳥の神瑞、八幡の鳩、源家の旗、すべて白きは皇國の祥瑞なれば天機白熊をいだししも昇平萬歳の吉瑞成べし。山家の人の話に熊を殺こと二三疋、或は年歴たる熊一疋を殺も其山必らず荒る事あり、山家の人これを熊荒といふ、此故に山村の農夫は謂て熊を捕事なしといへり熊に靈ありし事古書に見えたり。

熊人を助く

人、熊の穴に墜て熊に助られしといふ話諸書に散見すれども、其實地をふみたる人の語りしは珍ければここに記す。

余若かりし時、妻有の庄(魚沼郡の内に在り)に用ありて兩三日逗留せし事ありき、頃は夏なりし故、客舎の庭の木かけに薙をききて納涼居しに、主人は酒を好む人にて酒肴をここに聞き余は酒をば嗜ざる故茶を喫て居たりしに、一老夫ここに來り、主人を視て拱手て禮

をなし後園へ行んとせるを主人呼とめ老夫を指していふやう、此叟父は壯年時熊に助られたる人なり、危き命をたすかり今年八十二まで健に長生するは可賀老人なり、識面になり給へといふ、老夫莞爾として再去らんとす、余呼とめ熊に助られしとは珍説なり語りて聞せ給へといひしに主人余が前に在し茶碗をとりてまづ一盃喫とて酒を滿碗とつぎければ老夫薙の端に坐し酒を視て笑をふくみ續て三碗を喫し舌鼓して大に喜びさらば話申さん、我廿歳二月のはじめ薪をとらんとて雪車を引て山に入りしに村に近き所は皆伐盡してたまたまあるものは足場あしきゆるゑ山一重踰て見るに薪とすべき柴あまたありし故自在に伐とり雪車歌うたひながら徐々束、雪車に積つ縛つけ山刀をさしいれ住に隨て今來りたる方へ乗り下りたるに一束の柴雪車より轉び落、谷を埋たる雪の裂隙にはさまりたる故、捨て歸らんと惜ければその所に至り柴の枝に手をかけ引上んとするに少しも動ず、落たる勢に撞いれたるならん、さらば重き方より引上んと匍匐して双手を延し一聲かけて上んとしたる時、

足に踏力なき故己が力に己が體を轉倒、雪の裂隙より遙の谷底へ墜けるが雪の上を濼落たる故幸に疵は受けず暫は夢のやうなりしが漸く心付上を見れば雪の屏風を立たるが如く今にも雪顔やせん生たる心地はなく暗はくらし切ては明方にいでんと雪に埋たる狭谷間を傳ひ漸くにして空を見る所に至りしに谷底の雪中寒烈しく手足も龜手一步もはこび難く、かくては凍死べしと心を勵し猶途もあるかと百歩ばかり行たりけん瀧ある所にいたり四方を見るに谷間の途極にて甃に落たる鼠の如く如何ともせん術なく惘然として胸迫り如何はせんとといふ思案さへ出ざりき、さて是より熊の話なり。今一盃たまはるべしとて、自酌でしきに喫、腰より烟草管をいだして烟を吹るとする故、其次はいかにとたづねければ老夫曰さて傍を見れば潜るべき程の岩窟あり、中には雪もなき故這入り見るにすこし温なり、此時心づきて腰を探り見るに握飯の辨當もいつか落したり、かくては飢死すべし、さりながら雪を喰ても五日や十日は命あるべし、その内には雪車歌の聲さへ聞れば村の者なり、大聲

あけて叫らば助けられし、それにつけても伊勢さまと善光寺様をお頼み申より外なしと頻に念佛唱へ大神宮を祈り日も暮か、りし故ここを寢所にせばやと闇地を探り、這入りて見るに次第に温なり、猶も探りし手先に障しは正しく熊なり、愕然して胸も裂るやうなりしが逃に道なく迎も命の期なり、死も生も神佛にまかすべしと覺悟を極め、いかに熊どの我が薪とりに來り谷へ落たるものなり歸には道がなく生て居には喰物がなし、とても死べき命なり、撃て殺さば殺したまへ、若し情あらば助たまへと怖々熊を撫ければ、熊は起なほるやうにてありしが、暫しありて進み出で我を尻にておしやる故、熊の居たる跡へ坐りしにその温なる事炬燵にあたるごとく全身あたたまりて寒を忘れし故、熊にさまゝ禮をのべ猶もたすけ給へと種々悲しき事をいひしに、熊手をあけて我が口へ柔におしあてる事たび／＼なりし故、蟻の事を思ひ出し、舐て見れば甘くして、すこし苦し、しきりになめたれば心爽になり、咽も潤ひしに、熊は鼻息を鳴して寝るやうなり。

さては我を助るならんと心大におちつき、のちは熊と背をならべて臥しが宿の事のみおもひて眠氣もつかず、おもひ／＼て後はいつか寢入たり、かくて熊の身動をしたるに目さめてみれば穴の口見ゆるゆゑ、夜の明たるを知り、穴をはひ出で、もしや歸るべき道もあるか、山にのほるべき藤づるにてもあるかとあちこち見れどもなし、熊も穴をいでて瀧壺にいたり水のみし時、はじめて熊を見れば犬を七つもよせたるほどの大熊なり、又もとの窟へはいりしゆゑ、我は窟の口に居て雪車歌の聲やすらんと耳を澄して聞居たりしが、瀧の音のみにて鳥の音もきかず、その日もむなく暮れて又穴に一夜をあかし、熊の掌に飢をしのぎ、幾日たちても歌はきかず、その心細き事いはんかたなし、されど熊は次第に馴可愛なりしと語るうち、主人は微醉にて老夫にむかひ、其熊は牝熊ではなかりしかと三人大ひに笑ひ又酒をのませ盃の黙酬にしばらく語消けるゆゑ、強てその次をたづねければ、老夫曰く、人の心は物にふれてかはるものなり、はじめ熊に逢し時はもはや死地こと

、覺悟をきはめ命も惜くならずしが、熊に助けられてのちは次第に命が惜しくなり、助くる人はなくとも雪さへ消なば木根岩角に縋てなりと宿へかへらんと、雪のきゆるをのみまぢわび幾日といふ日さへ忘れて虚々くらししが、熊は飼犬のやうになりてはじめて人間の貴き事を知り、谷間のゆる雪のきゆる里よりは遅く、たゞ日のたつをのみうれしくありしに一日窟の口の日のあたる所に虱を捫て居たりし時、熊穴よりいで袖を唾て引しゆゑ、いかにするかと引れゆきしに、はじめ濼落たるほとりにいたり、熊前にすゝみて自在に雪を搔掘、一道の途をひろく、何方までもとしたがひゆけば又途をひらき／＼て人の足跡ある所にいたり、熊四方を觀て走り去て行方しれず、さては我を導きたるなりと、熊の去りし方を遙拜、かす／＼禮をのべ、これまつたく神佛の御蔭ぞとお伊勢さま善光寺さまを伏拜うれしくて足の踏所もしらず、火點頃、宿へかへりしに、此時近所の人々あつまり念佛申てゐたり、兩親はじめ愕然せられ、幽靈ならんとて立さわぐ、そのはづなり、月代は衰のやう

にのび、面は□のやうに瘦たり、幽靈とて立さわぎしものちは笑となりて、兩親はさらなり人々もよろこび、薪とりにいで、四十九日目の待夜なりとて、いとみなたる佛事も俄にめでたき酒宴となりしと仔細に語りしは、九右衛門といひし小間居の農夫なりき、其夜燈下に筆とりて、語りしまゝを記しおきしが、今は昔となりけり。

——鈴木牧之——

人に馴る、熊

山獸の中、熊は人に馴安きものなり華山のさき牛の尾と三條への別路に菓賣女のかり初に生居るが、熊の子を撃ぎたるを、おのれ立より見て其菓物を買て熊に與へたれば、女うまいと申せといふ聲に隨ひてうなりたる、いかにもうまい／＼と聞ゆ、幾度も同じ伊吹山より未だ乳を飲むものを人の捕へ來るを買て初め物を喰て與へしに、今は三とせになれりといひしが猶小なりし、旅人來合て是は大にして觀物の料に賣んとにやといひしに女いなかく養ひ何か賣べき生涯餓ぬべし之より是が爲に物買ふ人も多しといはれて旅人は得ものいはざりき。

——伴蒿陰—— 関田耕筆 ——

隨筆に現れたる熊

熊の月の輪

熊につききのわとて、咽喉の下に白き毛あり形月の輪の如くなれば、しかいふとなん、さるに、そのつききの輪に不同あり、圓なるあり半輪あり、織月のごときあり、またつききのわのなきあり、こはその熊の生る、日、十五日なれば輪圓なり、晦日なれば輪なし、餘は月の盈缺によりて准知すべしといふ、一奇事なり。

——兎園小説——

熊茄子を忌む

熊は茄子をいむ、深山の人、薪をこりにゆくに必らず茄子を帶ふることを見れば、熊かならず走り去る、茄子野にあるときは熊膽小なり、茄子なき時は大なり、茄子を見せるとりたる熊の膽はかならず小なりとぞ。

——菅茶山——筆のすまび——

熊送り

往昔伊能人種に於て行ふ祭例あり、之を熊送りと稱ふ、蓋しアイノ人が山間に於て獲

得たる乳熊を射ら養育し歳三四年を重ね漸く

成長するに至つてや、生猛強なるを以て善く養主に従はず、養主も亦禦養する能はざるに依り遂に之を壓殺するに至るの時を云ふ、土人熊をしてカモイと稱ふ（カモイは土語神なり）即ち神の一分に置くを以て之を厚く祭るなり、于時明治十七年一月中院根室縣下根室國根室郡幌茂知村に於て熊送の舉あるを聞知す恰も善し此日休暇に當るを以て、清閑宿主某並同僚一員と伴り（此間脱文）裾模様あり、或は赤の唐縮緬を着するあり、或は綿南部に黄八丈に又はドンスの帶を締むるあり、皆以て嘉永年間に御殿女中の着古と見受く、然らざれば田舎劇場の御殿場とも申すべし、又男子は概して陣羽織を衣裳の上に着し、義袴然たるものを着け、其異状とは畫の犬おふ人夫を見ると一般尤も奇なり、みな鮮革製の靴を履む（即チリ）連立横飛手を拍ち相歌ひ、相舞、相躍ること三十分許りにして止む、夫より地

熱達したるものといふべし。右にて止む。

——筆者未詳——百草——

熊栗の棚か

九月の末、熊栗の棚かくと云事有り、これは棚と云ふ字を書く故、いろ／＼説有り、だんは度にて食物を載る所の事なり、冬の要意に栗を取て穴の中に土を搔て埋め置く事なり、栗は貯へ安き物故なり、津輕などにては熊の棚とて九月頃山の大木のまたにかた／＼かけ、又かた／＼を山にかけて、夫より棚かき始め木々の枝を折りてかく也、高さ六七尺も有り何の爲めとも見え、其上に登りてゐる計なりと、津輕者語るなり、栗に限りたるに非ずとなり。

——著者未詳——關祕録——

熊は無毒

家老味岡李之允が普代若黨に岡其右衛門と云あり、若き時木實村へ夜網に行き人足を連れて歸し途中に獸ありしを犬と思ひ人足シイシイと追けるに犬にはあらで熊なりしかば、直に立上りて人足に組つく、其右衛門は先に立て行しが、回視すれば人足はや熊に組しかれ事急なれば手に持たる松明にてその熊を撲し

が火先折て火消ゆ、折しも暗夜にして物目も分たず頓て其右衛門に熊とり付しが、しばしが程組合熊の力強くして其右衛門も組しかれて所々嚙る、あやにく濕たる網を首に掛てありしが、手に巻付て刀を抜く事ならず、せん方なければ喰付たる所の舌を取て力を極て牽ければ熊もこれに苦みしと覺て何方へか逃去しとなり、世傳に熊は無毒の者と云ならはすに如何にも其如しと見えて處々疵を被りしが三四日も經て癒その後いさ、かも障ること無しとぞ、此人今尚味岡の家にてあり。

——松浦靜山——甲子夜話——

熊突

加賀越中は世に名高き熊多き所なり、熊膽なども此邊より出づるを極上の品と定む、余越中に在りし時、飛驒境の山中の人に會ひて熊を取ることを聞くに、其獵者も亦勇猛なり、冬に至り雪降積る時は、熊皆穴に入住む其時獵者ども薪木を多く持行きて熊の住める穴の中へ投入る、に熊怒りて其薪をうしろの方に押しやる程に、穴の奥の方次第につまりて其熊段々に穴の口の方へ出で、つひには穴

を移して皆一小丘に至る、茲に一座席を設く

先づ前面に花菴を敷き、後に同品を立て之れに數種の寶器寶具を並列す、其器具たる古刀あり古弓あり、古矢あり、銅羅あり、太鼓あり、鐵砲あり槍あり小刀あり太刀あり德利あり、ランプの口あり五徳あり鐵瓶あり、實に古道具店の身代限を見るが如し一品として満足なるものなし、抱腹笑止千萬なりき、やがて右の熊を縛して養婦之を引來り觀者群衆の中に疾走馳驅せしむ、東西に奔走し又は南北に疾走するの勢ひ甚猛烈なるを覺ゆ、此の如く誘引勵奮發氣せしむるは他なし熊膽の大なるを待つなりと云ふ、其愚は笑ふべしと雖も其智は意想の外に究理なりと存す、其間二時間餘、前と同じく圓陣狀をなし女は歌舞して男は會飲す、熊の養婦に馴る、宛も愛兒の母に於けるが如し又愛するに足る、午後五時過に至つて祭式終るもの、如し、それより熊に又酒を飲ましめ而して後×の如き狀を作りたる木の間に熊頭を壓し入れ之を數人にて壓殺するや否や、第一着に咽喉を割きて膽を取り夫れより皮を剥ぐ、其技速にして且つ手際なる善く

皆つまりて熊穴の外へ出づる時、長さ一間計の手槍を以て月輪のあたりをねらひて突くなり、熊突かれながら其槍をかなぐり捨んとして引く程に彌槍深く身を貫く、獵者は始終其槍をはなたず取付き居て加勢の獵者を待つ、加勢の獵者走りかゝつて、まさかりを以て熊の頭を打ち取ることなり、もし槍を突損じぬれば、熊の掌にて槍の穂先を握るに丈夫なる槍の身三つ四つに折碎く、左あれば獵者もつかみ殺さるゝとなり、余是を聞きて、かく手詰の危き働をせんよりはなど鐵砲にてはうたざるといへば、鐵砲は猶あやふしといふ、いかにといふにもし月輪を打ちはつす時は、たとへ鐵砲の玉、熊の身を貫くといへども、忽飛びかゝりてつかみ殺すなり、槍は獵者其槍に取居る故に、飛びかゝる事あたはず、されば命を失ふこと無しとなり、只手負の熊には中々近付きがたきものなり、手負はざる間はおだやかなるものゆゑ近付くこと甚自由なりと語れり誠に漁者は水に勇に獵師に山に勇あり、盜賊は又利欲に勇あり、皆其習ふ所に勇ありと思はる。

——橋南翁——東遊記——

熊の繪畫

熊は猛獸の中でも、その相恰に何處となく愛嬌があるので、時に繪畫にも現はれるが、動物畫の中では、決して豊富とはいへない、是を畫いてゐるのでは、矢張り四條圓山の人々に多い、先づ應舉には、中に黄初平を描き右に躑躅に熊、左に犬を描いた三幅對がある尾州徳川家の舊藏で一寸面白く、藤田家には中央に雪中の熊を描き、左右に花卉を描いた變つた構圖のものがある、一鳳には秋草に熊を配したのもある、大久保子爵家の藏品だつた、森徹山も時々熊を描いた、雪中に熊が蟹を探す處や、月の輪をあらはに見せて仰向いてゐる圖など、此の外、文晁には雪中熊の圖があり、近代の人では熊谷直彦に谿間の熊の力作がある、野津家の所藏で面白い作、又小林吳橋は百獸屏風の中にこれを描いてゐる。

西村五雲は動物畫が巧みであつた、その初め、第一回の文部省展覽會に、白熊を描いて

評判を取つた、竹堂張りで、達者な筆がよく熊の姿を寫してゐた、その時には、京都の正田芳沼氏も熊を描いて出品した、但しこれは白熊ではなく黒い普通の熊である。最近では、二三年前に島田墨仙氏が、『山中勇者』と題して、雪中の熊を描いた小品を一二回展覽會に出品したことがある、雪中の熊を描いたものでは、改組後の第一回文部省展覽會に、川村曼舟氏が霧氷の中にこれを描いてゐる、但し添景に過ぎない。

熊の和歌と俳句

熊の和歌と俳句

れから、平子聖龍氏が曾て熊祭りを畫いたことがあつた、祭が主になつてゐるが、矢張り熊に縁のないわけではない。

又、古い方へ戻るが、松方公爵家に、狩野探幽筆の『白熊の圖』があつた、探幽には此の白熊や狐の圖などもあつて相應に寫生に力を注いでゐることがわかる。

更に昭和十三年秋の院展に、郷倉千靱氏の山の夜に『あなぐま』が描かれてゐた『あなぐま』は、熊の名を冠してゐるが、これは熊科の動物ではなく鼬科に屬し、本邦特有の動物で本州、四國及び九州に限り棲息する、普通の熊に比して遙に小さく夏と冬と其の毛色を異にする。

彫刻では古くギリシヤのアクロポリス博物館に西紀前五百年といふ、熊がある、尤も現存してゐるのはその頭部だけである。

いま北海道では、アイヌ部落の土産品として熊の木彫を賣つてゐる、誰が教へたのか、土地柄よく姿が整つてゐる、尤も藝術的に云々するほどのものではない。

熊の和歌と俳句

荒熊の住むとふ山のしはせ山責めて問ふとも汝が名は告らじ(萬葉) 作者 未詳
あら熊のなれて住むなるしはせ山山もいかにかはけしかるらむ 後嵯峨院御製
あら熊のすみける谷をとなりてみやかに遠き柴の庵かな 後京極攝政
しなのなるすかのあら野に住む熊の恐ろしきまでぬる、袖かな 俊頼 朝臣
おくやまにすむあら熊の月の輪によめこそいと曇らざるらめ 衣笠内大臣
人なれぬすがのあら野のあら熊のいるやのさきもしらず顔なる 正三位知家卿
熊のすむ昔のいは山おそろしみうべなりけりな人も通はぬ 信實 朝臣
みやまぢに住むあら熊も子をおもふ友にはなつく心あるらむ(夫木集) 爲家 卿
小木曾山大雪ふれるあら熊のこもるうつろに宿やからまし 香川 景樹
荒熊はゆくへもしらず松山のうつろにこも

る木枯のころ 加納 諸平
熊つれて膽を賣る人らとほりけり冬をかなしむ村となりぬらし 穂積 忠
山の間ひひとり居りつゝ息つかしあはれとほ聴く熊の仔を呼ぶを 芥子澤新之助
うすぐらき鐵格子より熊の子が桃いろの足いだす雪の日 與謝野晶子
顛たれて北極熊がくりかへすしぐさあはれなり岩鼻の上に 中村 正爾
北極熊の大き姿のうつりつづ青すむ淵のふかくさむしも 同
熊まつり仔熊の舞の一さしに太古の笑を見るが淋しも 並木 落穂

熊の俳句

初夢に熊の吉をトしけり 椽面坊
乗初の馬橋に敷きぬ熊の皮 不倦生
栗架を熊は見ねども深山かな 青々
熊飯を樵夫道者も尋ねよる 同
熊飯の百歩に山花路をなす 同
武藏野の尾花に入るか大日熊 才磨
今熊を時雨る、頃はあれぞかし 其角
あら熊のかけ散してや前の雪 北枝
雪深し熊も誘ふおとし穴 子規
雪の上に魂なき熊や神事すむ 誓子
神が召すいけにへ熊の胴飾り 同
蒼穹に熊まつる箭を放ちけり 夢城
凍土にひきすゑられし神の熊 凍魚
事切れし熊に泣伏すメノコ哉 雨意
會長の藁のかんむり熊祭 駄々子
雪田の一點熊のかへるなり 涼斗
鞭に媚びて熊立ち歩く憐さよ 丑秋
熊つれて熊の膽賣り來りけり 薦堂
熊つれしアイヌ芝居の一座哉 郊春
月の輪のよごれて檻の熊哀れ ひさし
荒熊の爪の痕ある峰祠 駄々子
冬枯や熊祭る子の蝦夷錦 子規
熊の出る噂にかこむ火桶かな 冬朴
熊突や氷を渡る天鹽川 摺葉
熊を撃て四圍の氷に響きけり 寒水
つつがなき汝が巧みや熊の棚 維舟

羊と山羊と

羊は哺乳動物中、雙蹄類反芻類中羊族に屬す、現今、廣く飼養せらるゝ、綿羊の祖先に關しては、唯一種なりともいひ、又は數種ありとの説あるも、兎に角東ベルシヤ及び小亞細亞産の野生の赤羊(オビス・オリエンタリス)より作られし品種なることは疑ひなし、綿羊は野生種とは尾長及毛皮に相違著し、角は綿羊にありては種々の變化あり、例へば、ドーセツト品種は牝牡共に之を有し、他の品種にては牡のみであり、尙ほサウスダウン品種などは牝牡共に之を缺如す、之れに反し、他の品種にして附屬角ありて四角を有し、又八角を備ふるものさへあり、大體品種を分ちて長毛、短毛及び山嶽品種の三とす、色は一般に灰白色にして時に顔肢黒色のもの又灰鼠色のもの等あり、綿羊は採毛の外、肉用にも有用なる畜養動物なり。

—動物圖鑑—

やぎ
山羊は昔時小亞細亞ベルシヤ地方の野生山

羊と、ヒマラヤの西部アフガニスタン地方の野生種との雜種を作り、スピスにて人為淘汰により家畜となれるもの多しと傳へらる、我國へは徳川時代支那より琉球に移入し、次で九州(薩摩、大隅、長崎)に入りしが如し、嘉永年間ペルリ提督は小笠原群島にも放ちたり、山羊の畜養品種は中々多く、其形狀色彩角形、毛量等千差萬別にして一定せず、角にありては牝牡無角(ザーネン品種)スピス産(乳用)有角(アングラ品種)等あり、又印度品種の如く丈高く長耳にて毛少なきあり、アングラ品種の如く毛は地面に達せんとするあり、色は純白、灰白、褐、赤、黒等に及ぶ、品種には上記の外、英國、アイリッシュ、トゲンベルグ等あり、牡は頸に毛塊垂下す。

—動物圖鑑—

羊の角

今日偶に見るやうな一本角の羊も昔は無かつたのだ、ある種の羊には、法外に長い螺旋

狀に扭ぢれた角があつて、それが時には前額の上に立つてゐたり、時には横に生へてゐるが、その武器は役に立つといふよりも、脅かしのもので、額の上の無用な荷物であるばかりで無く、藪の中を通る時には、羊にとつて大きな苦しみの種になる、所が此の不便な飾りをもつと多く持つてゐて、藪の中に入つたら嚙ぞ困るだらうと思ふものがある、サイプラス島の羊には二本の角がある、一本は額の上に眞直ぐに立ち、一本は曲つて耳の後ろの方へ伸びてゐる、ファロー島の羊には三本の角があり、皆螺旋形になつてゐて、後ろの方へ曲つてゐる、フランスの地方の羊は、通例二本の角がある、そしてつと小さく單純に一寸曲つてゐるだけだ、かういふのが原始時代の羊の角であつたに違ひない、が今では吾々の羊の大部分は全然角を持つてゐない、羊にとつてはそれが一番好いので、斯うして無用な荷物が無くなつたわけなのだ、つまり二本も三本もあつたり妙にねぢれた角や地面に曳すつたり脂肪で膨れた尾などは吾々には用のないものだ。 —フアアル—家畜の歴史—

羊の傳説神話

支那に於ては夙に羊を養つたもので、『禮記』にも『食麥與羊』とあり、これは羊の肉を食うたことであるが、また羊を屠つて月の朔日に神を祭つたことから、『告朔の餼羊』といふ語がある、日本の風習には無いことだが、支那でも猶太でも其外の國々では上古神を祀るに動物を屠つて捧げたのである、今の支那人は肉といへば豚を主とするが往古には羊を主としたものか、羹といふ字の如きは羔(こひ)の字を冠して出來てゐる、詩經に『羔羊之裘』とあるはこれは毛皮として着たもの、また羊は多くむれてゐるから群の字あり、美義義なども皆羊篇である。

希臘の神話にはパンといふ人體で山羊の脚をした神話があつて羊を飼つてゐたとある、又テッサリーの國にアサマスといふ王があつた、其の妃ネフィールとの間に一男一女があつた、然るに王は老年になつてこの妃に飽が來て離別し別にアイノといふのを娶つた、その

頃國內には大飢饉があつたが、アイノは之を以て先の妃腹の王子フリックスのあるため神々が怒つて此の災を降すものである、早く彼を殺せよと老王を騙かした、王はアイノの色に溺れ其の言に聽いて愛子を殺さうとする、

母ネフィールはマーキュリー神から金毛の羊を授かり、その背に二子を乗せて危難を逃れしめる、金羊は天驅つて東方に奔る、亞細亞と歐羅巴との境の海峽まで來ると王女は誤つて海に墜落する、其名がヘレであつたから後に其の海峽をヘレスポントと呼ぶやうになつた、今のダーネルス海峽がそれである、これより金羊は王子フリックスのみを乗せて黒海の東岸なるコルチスの國といふに到り其の王イエテスの手に王子を委ねた、王子はそこで金羊を屠りジュピターの大神を祭り金毛を剃いで之を王に獻じた、王は之を神聖なる樅の木に懸け不眠の毒龍をして守護せしめてゐた、然るに後日に至りテッサリーのジェ

ーソン王子なるものアルゴスといへる大船を造りハーキュリス、セセウス、オルフェウスなどいふ勇士の面々五十人を率ひてコルチス國に渡り毒龍を退治し金羊を奪ひ歸り國の寶としたといふ話がある。

希臘のフリジヤは上古に於ける最も名高い羊毛の産地であつた、猶太に於て牧羊の盛なりしことは聖書に屢々見えてゐるとほり、人類の始祖アダム、イヴの第二子アベルは羊を牧ふもので、其の兄カインは土を耕す人であつた、此の猶太民族は羔(こひ)を屠り之を燒いて神を祭るの風俗を傳へてゐた、ダビデ王は少年にして野に羊を牧ひをりしとき投石索にてペリシテ人の巨漢ゴリアスを斃した、羊は溫和なるもので、また神の御前に犠牲として捧げらるゝものであることからして、聖書にはキリストを呼んで『神の小羊』と稱へてゐる、基督教にてはキリストを牧羊者に喩へ、信者を羊に比してゐる、羅馬時代にも羊毛を着たが中世紀時代に入りてはこれが歐羅巴人の主な衣服をなしてゐた。

—櫻井鳴村—世界の衣食住—

蘇武と羊

蘇武、字は少卿、少にして父の任を以て兄弟並に郎と爲り、稍にして遷て移中廐監に至る、天漢元年、武帝、武の中郎たるを以て、使として節を持せしめ匈奴の使の留て漢に在る者を送らしむ、武副の中郎將張勝及び假吏常惠等と與に、士と斥候百餘人を募て俱に、既にして匈奴に至り、幣を置て單于に遺る、緘王長水の虞常等と與に謀て匈奴の中に反するに會ふ、單于怒て諸の貴人を召し議して漢の使者を殺さんと欲す、左伊秩訾が曰く、宜しく皆之を降す宜しと、單于衛律をして武を召し辭を受けしむ、武惠等に謂へらく、節を屈し命を辱しめば生くと雖も何の面目あつてか以て漢に歸らんと、佩刀を引て自ら刺す、單于其の節を壯なりとし、愈々益々之を降さんと欲し、迺ち武を大窖の中に幽して絶えて飲食せざらしむ。

なし、武を北海の上、人無きの處に徙し羝を牧せしむ、羝乳せば乃ち歸ることを得せしめんといふ、武既に海上に到る、廩食至らず、野鼠の去せる中實を掘て之を食ふ、漢の節を杖にして羊を牧す、臥起に操持して節旄盡く落つ、後、李陵北海の上に到り、武に語つて曰く、上崩すと、武之を聞いて南に郷て號哭し血を歐す、且夕に臨すること數月、昭帝位に即き、數年にして匈奴漢と和親す、漢武等を求む、匈奴詭て曰ふ、武死すと、後漢の使復匈奴に至る、常惠其守る者に請て、與に夜漢の使に見ゆることを得、具に自陳し道て使者に教ふ、單于に謂て言く、天子上林中に射し、雁を得たり、足に帛書係る有つて言ふ武等某澤中に在りと、使者大に喜ぶ、惠が語の如し、以て單于を讓る、單于左右を視て而して驚き漢使に謝して曰く、武等實は在りと、是に於て李陵置酒して武を賀して曰く、云々、陵泣下ること數行、因て武と決る、凡て武に

隨て還る者九人、武、始元六年の春を以て京師に至り、拜して典屬國と爲り、秩中二千石に錢二百萬公田二頃宅一區を賜ふ、武、匈奴に留ること凡そ十九歳、始め強壯なるを以て出て還るに及んで須髮盡く白し、武、年八十餘にして神爵二年病で卒す。(原漢文)

前漢書列傳二十四

蘇武 李太白

蘇武在匈奴、十年持漢節、白雁上林飛、空傳一書札、牧羊邊地苦、落日歸心絕、渴飲月窟水、飢餐天上雪、東還沙塞遠、北槍河梁別、泣把李陵衣、相看淚成血。與蘇武詩 李陵

別陵詩 蘇武

雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留期館、我當歸故鄉、一別如秦胡、會見何渠央、愴恨切中懷、不覺淚霑裳、願子長努力、言笑莫相忘。古文前集

羊と神仙

支那の神仙の中には、羊に關係のあるものが少くない、その二三を引いて見る。

黃初平

黃初平は晋の丹谿の人、十五の年に羊を牧してゐると道士に遇ひ、導かれて金華山の石室にあること四十餘年、其兄の初起がこれを尋ねてゐるが更に知れない、ある時道士善十に遇つた、开で試に弟の初平の行衛を聞いて見ると金華山中に一人の羊を牧する少年があるが、それではないかといふ、初起は金華山にこれを尋ね、初平にあひ、羊は安かにあるかと問ふ、初平は山東に在ると答へた、そこで山東へ往て見ると石ばかりで羊は居ない、初起これを詰ると、初平は持つた鞭を揮つて石を叱つた、するとその石は忽ち羊となつて數萬頭に上つた。

修羊公

修羊公は魏の人である、華陰山の石室の中に石榻があり、これに臥てゐると石は盡く陥

つてしまふ、漢の景帝が禮を厚うして王邸中に迎へたが一向道を得ることが出来ない、帝は徐に謂て曰く、何れの日にか語を發するのかと、すると忽ち白色の石羊となり、その傍に題して曰く、『修羊公謝天子』と、後、その羊を通靈臺に置いて何處へか去て了つた。

葛由

葛由は羞の人である、周の成王の時、好んで羊の木彫を作り之を賣り、一日羊に騎つて蜀に入つた、蜀中の王侯貴人之を追つて緩山に登つた、緩山は峨嵋山の西南にあつて最も高い、これに従ふもの皆歸らず仙となつた。

尹喜

尹喜は公文といひ天水の人である、老子に就いて道を學んだが、老子これを愛し、今より千日の後蜀の青羊で會ふからといつて別れた、尹喜は千日の後、蜀の青羊へ出かけたがわからない、これより前、老子は一旦昇天して太微宮に入つたが、乙卯の歳再び人間とな

り蜀の大官李氏の許に生れた、豫め一頭の青龍を青色の羊としてその護とした、一日此の羊行方不明になつたので、童子をして探させると、折よく探してこれを索いて歸らうとした、一方尹喜は青羊に老子を尋ねあぐんで困じてゐると童子が青羊を索いて行くので、そのわけを尋ねると、童子は一伍四什を精しく語つた、开で尹喜は李氏の家に生れた嬰兒こそ老子の再來であらうと、訪ねて行くと、嬰兒は忽ち長身の老子となつて、絶えて久しい尹喜との對面をした。

白石生

白石生は中黃丈人の弟子、彭祖の時既に二千餘歳、長生を以て貴しとしたが、なほ人間の樂を失ふことを惜しみ金液の藥を以て、貧家の病者を救ひ、又、猪を養ひ、羊を牧し數年にして萬金の富を得、藥を買て之を服し、又白石を煮て糧とした、これに因て白石山に居を定め自ら白石生と號した、時々肺を食ひ酒を飲み時に穀を避け日に往くこと三四百里顔色は三十位にしか見えなかつた。

列仙全傳

上毛の羊碑

上野國に羊碑あり、上古羊大夫と云人ありて日京師に往來して王事に供奉せし功に依り其地を賜はれりと云傳ふ、其碑之文云、
辨官符、上野國片岡郡、綠野郡、甘良郡三郡内三百戸郡成、給羊成多胡郡
和銅四年三月九日甲寅宣

左中辨正五位下 多治比真人
太政官二品 穗積 親王
左大臣正二位 石上 尊
右大臣正二位 藤原 尊

東都に澤田東郊、名は文治なる書家あり、上野に遊て打碑し來り奥州壺碑に比すれば年代六十年許古く、書も壺碑に勝れりとて秘藏す東涯翁名物六帖云、羊碑給の下石上、藤原下共に三字皆盡不見而文治は三字共不盡鮮明也と云ふ、只羊尊の字不_レ成_レ文を苦て説を求む、郡成は郡と成すと讀むか、羊は養の首か、古く羊養通用せる者と覺えたり、證文は今急に不_レ思出、然れば給羊は即給養にて、其三百

戸の新郡之耕作成就の間は養を給せしならん、今も新田開發の地へは、五年も三年も作り取りに命ぜらるゝ、如くなるべし、尊字もとより不解、位置書の體も無_レ覺束と答ふ、只年號の古きと書體の壺碑より倍して點畫奇異なるのみ、一體埒もなきものなり。

林陸翁——仙臺閑語——

ひつじの語

則按、ヒツジと云和名は、十二支の未より出たり、日中する時は午にとゞまり、それよりめぐりて未に至る、この故に日辻と云ふ意にて未の字を訓を付しなるべし、辻の字は俗字なり、ツジといふ事は、馬の旋毛をつむじと云ふ、又ツジ共、辻の訓にて其意なるべし。

平維章等——可成三註——

羊の歌

身の程をしれる羊のかはごろもかむるしら
いと色もなくして 小澤 蘆庵
牧草のふみ心地よき羊どもここにありなば

物思はざらむ(月寒にて) 佐佐木信綱
雲しづむ夕牧のはてに點々と羊は黒き星のごとしも 同

楡の大樹繁み立つかけをのそりと來し野羊の翁がとほけたる顔 同
しづかなる海かな夕日かな吾に近く黙居り 同
綿羊の群れ 同

山莊の夫人に答へ啼く山羊はめでたし支那の白鸚鵡ほど 與謝野晶子

程もなくひまゆく駒をみてもなほあはれ羊のあゆみおぞ思ふ(新勅櫻) 源 有 房
もえつゝく香のけふりの時移りひつじの歩み今日も程なし(六帖) 藤原 光俊

俳句

春曉や神を樂しむ羊飼 月 舟
解氷や土手歩きぬる山羊の群 三 味
刈られたる毛に埋れし羊かな 青水草
永き日を七面鳥と羊かな 冬 葉
春寒や埒に人戀ふ羊の子 滴 翠
夕鳴く聲篋を分け山羊の白鬣 寒 骨

羊と美術作品

美術作品に現はれた羊も、區別をすれば普通の羊と山羊と、綿羊の三種となるが、繪畫等に多く現はれるのは前の二種である、古代支那では牧羊の業も夙に行はれ人の生活には密接の交渉があつただけに、古くから現はれてゐる、日本に現存するもの、中、最も古いのは奈良正倉院の御物藤原屏風であらう。

繪畫に現はれたものとしては、或は黄初平とか蘇武とかいふ人物に配されたものが矢張り多い、黄初平は、古く雪舟にもあり、京都の妙覺寺には元信の中で、中を黄初平とし左右を蘆雄にした三幅對があり、帝室博物館には渡邊始興の作があり、又應舉も屢々これを畫いてゐる。

單獨に羊丈け描いたものでは、山樂筆の杉戸が東福寺の開山堂にある、これは山樂の作として珍らしく、帝室博物館にある狙仙の扇面の羊も珍らしい、此の外葛飾北齋にも『樹

下遊羊圖』があれば春木南溟にも同題のものがある、南畫畑では華山に羔羊などがある、現代の人々の作では木島櫻谷氏の第十一回帝展出品『匈奴に於ける蘇武』、中村不折氏の同期『蘇武牧羝』などが見える。

満洲や北支あたりの風物で、羊を配した作では古く李安忠に『愛羊圖』(榛原家舊藏)あつて唐美人が數頭の羊を牧してゐる作、一寸珍らしく、第十三回の帝展には川崎小虎氏の『牧笛』があり、十二年秋、川端龍子氏の作には『牧童』あつて個展に陳列された、改組後第一回の文展には上村松篁氏の『母子の羊』あつて好評を博した。山羊では十七回院展に中庭寂明氏の作があり、彫刻では上田直次氏の『山羊の親子』がある、十一回帝展出品。

西洋の藝術には羊は牧擧に遑もない、ギリシヤのアクロポリス博物館には『羊を負ふた

若者』の彫刻があり、ローマクリスタスの墓墳にはよき羊飼の壁畫がある、古典的名作としてはガン市、サンボウオン寺にヴァンアイク兄弟の『聖羊禮讚』があり、マドリッドのプラト美術館には、『聖なる羊』があり、ミレーもよく牧羊を畫いたが『羊飼の女』やルーブル博物館に珍藏されてゐた『羊飼とその群』、ホルマンハントの『贖罪の羊』などこれらは既に定評あるもの、『贖罪の羊』の如き、宗教畫としても素晴らしいものである。

山岳畫家の『セガンチニー』の作として本邦に傳へられてゐる作の中に、『アルプスの眞畫』がある、大原孫三郎氏の所藏で、二三回展覽會にても公開され人口に膾炙されてゐるし、ターナーの群羊圖もよく知られてゐる、ハンストーマの『春の野』は牧羊を背景に母と子を描いた名作、近代の人でシャール、シャックには、『羊小舎の中』、アンリーマルタンにも『林間の羊』がある、我が國の人でも辻永氏は羊が好きで、殆んど羊の作のみといふてもよい位、羊や山羊の作を公にした、この外毎年の彫刻の展覽會には必らず二三點の羊が現はれる。



行刊堂艸芸會台
社名